# 國語

卷四

教科書文庫
4
810
41-1941
2000302250

42041
教科書文庫
4
810
41-1941
200030
2250

教科書文庫
4
810
41-1941
2000302250

昭和十六年十一月二十一日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用

# 國語

岩波編輯部編

改訂版

中等學校教科書株式會社

広島大学図書
2000302250

資料室
3759
Iw1

草花の鉢　　正岡子規筆

廣島大學圖書之印

広島大学
教
26465
図書

# 國語　卷四　目次


一　初旅……島崎藤村……一
二　あづさの紅葉……伊藤左千夫　長塚節　島木赤彦　齋藤茂吉……一〇
三　曉鐘……奥田正造……一四
四　師の言葉……武者小路實篤……一八
五　板倉父子……新井白石……二三
　　板倉勝重……三

板倉重宗……二七
六　柿二つ……高濱虛子……三一
七　巡禮日記……愚庵……四〇
八　夜長……正岡子規……五二
九　凧……德冨蘆花……五四
一〇　遠望……吉江喬松……五九
一一　文鳥……夏目漱石……六六
一二　夜叉王……岡本綺堂……七四
一三　誠……三浦梅園……八八
一四　惜陰……貝原益軒……九四



一五　湖畔の冬……島木赤彦……九八
一六　北國空……泉鏡花……一一〇
一七　銀線を描く……浦松佐美太郎……一二〇
一八　創始者の苦心……杉田玄白……一三三
一九　二宮尊德の幼時……富田高慶……一三九
二〇　西鄕の一言……（氷川清話）……一四九
二一　天……（南洲翁遺訓）……一五四
二二　廚子王……森鷗外……一五八
二三　潮の音……島崎藤村……一七四
二四　神國の首都……小泉八雲……一七六

廣島大學圖書之印

國語　卷四

# 一　初旅

島崎藤村
名は春樹
詩人　小說家
帝國藝術院會員
長野縣の人
明治五年生

少年の私が、銀さんと一緒に東京へ遊學することになりました時は、銀さんが數へ年の十二、私が九つでした。まだ他に、お文さんの二番目の兄さんも、眼の療治のために同行することになりました。

その日も近づいた頃、銀さんは裏の梨の樹の下あたりに腰掛けて、兄に東京行の頭を刈つて貰ひました。村には理髮店といふものも無い時でしたから、兄が襷掛けで、掛ける布も風

呂敷か何かで間に合はせて、銀さんの髪を短く剪みました。私の方はまだ一向な子供でしたから、髪も長く垂れ下げたままでよからうと言はれました。

片田舎のことですから、私達が東京へ立つ前には、毎晩のやうに、親しい家々から客によばれました。私は銀さんと一緒にお文さんの家へも呼ばれて行つて、雞肉の汁で味をつけた「おうはん」の馳走になりました。何かにつけて田舎風の饗應を取交すといふことは、殊に私の村では昔から習慣のやうになつて居ました。

出發の前の朝、祖母は私達を爐邊に据ゑまして、食事しながら種々なことを言つて聞かせました。「今朝は言ふ、そのかはり明日の朝は何事も言はない。」そんなことを言つて、長いこ





と私達を側に坐らせて置いて、別れの涙を流しました。その晩、私は父の書院へも呼びつけられて、五六枚ほど短冊に書いたものを餞別として貰ひました。それは座右の銘にするやうにと言つてくれたので、日頃少年の私をつかまへて、口の酸くなるほど言つて聞かせた教訓を、一つ〳〵文字に表して書いたものでした。私はその全部を記憶しませんが、父があの几帳面な書體で認めた短冊の中には、あり〳〵と眼に浮かんで來るのもあります。

「行ひは必ず篤敬。云々。」

兄に引連れられて、翌日私達三人の少年は故郷の山村を立ちました。坂になつた驛路の名殘の兩側には、それ〴〵屋號のある、親しい家々が竝んで居ます。私達は、一軒々々、田舎風

峠　長野縣西筑摩郡神坂村峠

な挨拶をするために立寄りました。日頃洗濯や餅つきの手傳などに來る婆さんとか、又は出入りの百姓とかの人達まで、何れも門に出、石垣の上に立ちして、私達を見送つてくれました。九月の日のあたつた村はづれまで送つて來てくれる人もありました。暗い杉の木立の側を通り、澤を越して行きますと、峠と言つて一部落を成したところがあります。その邊まで私達に附いて來て名殘を惜しむ人もありました。峠を離れて、私達は旅らしい山道に上りました。

私達が大きな谷の底のやうなこの山間を出て、馬車に乘れる所まで行くには、是非とも高い峠を二つだけは越さなければなりませんでした。全く方角もわからなくなつてしまつたやうな、知らない道を三日も四日も歩いた後で、私は銀さん





達と一緒にさういふ峠の、しかも嶮しい、石塊の多い山道にさしかゝりました。私は風呂敷包を襷にして背中に負ひ、洋傘を杖につき、喘ぎ〳〵その坂を攀ぢ登りましたが、次第に歩き疲れて、お文さんの兄さんや銀さんから見るとよほど後れるやうになりました。日は暮れかけて、山の中は薄暗く見えるやうになつて來ました。

「金米糖をくれなけりや、歩けない。」

「くれるから、歩け。」

私は兄とこんな押問答をして、路傍の石に腰掛けては休み休み、また出掛けました。そのうちに金米糖どころではなくなつて來ました。私には歩けなくなりました。何となくお腹まで痛くなつて來ました。私は洋傘をそこへ投げ出して

杏掛　長野縣小縣郡青木村杏掛

動かずに居たこともあります。すると、兄が私の側へ來て、私の帶へ手拭を結はへつけまして、それで私を引き立てました。

この骨の折れる山道を越して、やつとのことで峠の下まで歩いて行きますと、澤深い溫泉宿のやうな家々の燈が私の眼に嬉しく映りました。そこが杏掛であつたかと覺えて居ます。

何處から馬車に乘つたかといふことも、はつきりとは記憶しません。唯、前の方へ突進する馬車と……時々馬丁の吹き鳴らす喇叭と、馬を勵ます聲と……激しく搖れる私達の身體とがあるばかりでした。

狹い車の上でまた日が暮れました。暗い夜の道を後に殘しては、私達は乘りつゞけに乘つて行きました。この馬車の



旅で、私達は一人の女の客とも道連になりました。矢張東京まで行く客で、故郷に殘して置いて來た私の母などよりはずつと若い人でしたが、私達の村にでも居さうな、田舍風な婦人ではありました。旅の包の中から菓子を取り出して、それを紙包にして私にくれたりなどしました。終には、私もこの小母さんのやうな人に慣れて、その膝の上に抱かれました。そして馬車に搖られて眠くなつて來ると、そのまゝ寐てしまつたこともありました。

「追剝だ。追剝だ。」といふ聲を聞きつけて、急に私は目を覺しました。馬車が何處を通るのか、皆目それは私にはわかりませんでしたが、闇に振る馬丁の烈しい鞭の音と、尋常ならぬ車の上の人達の樣子とで、賊といふことだけは知れました。

上州　上野國　現群馬縣
松井田　群馬縣碓氷郡　松井田町
烏川　碓氷郡に發源し高崎市の西で碓氷川に入る

馬車が疾驅してその場所を通り過ぎた後で、氣の荒い馬丁は手綱をゆるめて、賊が馬の脚へ來て掛らうとしたとか、この邊の夜道は物騷だとか、確に自分の一鞭は手答があつたとか、兄達に話し聞かせて笑ひました。　また馬車は暗黑の中を衝いて進みましたが、それが夜道に響いて恐しい音をさせました。

夜が明けてから、私達は田舍町の中を乘つて通りました。高い竹梯子の上で宙乘をする消防夫の姿が馬車の上から見えました。　そこは上州の松井田でした。

烏川を越した時の記憶は未だによく殘つて居ます。　私達は馬車を降りまして、皆歩いて渡りました。　あの邊の、廣闊とした白い光つた空は、まだ私の眼にあります。　客だけ下して置いて、河原から水の中へ引き入れた馬車の音を、まだ私は聞



萬世橋　神田川に架せられた橋及びその附近一帶の稱　東京市神田區の內

くことが出來るやうな氣がして居ます。

この旅は矢張七日ほどかゝりました。　私は馬車に乘つたまゝ、半分夢のやうに東京へ入りました。　その馬車が著いたところは萬世橋でしたが、あの頃の廣小路のさまは殆ど尋ねることも出來ないほど變つてしまひました。　今でも、寄席や旅人宿は殘つて居ます。　あの竝びに馬車の著くところがありまして、その前の竝木の蔭で私達は車から下りたかと思ひます。

（生ひ立ちの記）

伊藤左千夫
名は幸次郎
歌人 小説家
千葉縣の人
大正二年歿
年五十

## 二 あづさの紅葉

伊藤左千夫

高山も低山もなき地の果は見る目のまへに天
し垂れたり

おく山にいまだ残れる一むらのあづさの紅葉
雲に匂へり



長塚節
歌人 小説家
茨城縣の人
大正四年歿
年三十七

長塚節

諸樹木をひた掩ひのぼる白雲の絶え間にみゆ
る谷の秋蕎麥

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水
くみにけり

雞頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴
えにけるかも

島木赤彦
本名久保田俊彦
歌人
長野縣の人
大正十五年歿
年五十一

## 島木赤彦

まかがやく夕燒空の下にして凍らむとする湖の靜けさ

冬の日の光とほれる池の底に泥をかうむりて動かぬうろくづ

高槻のこずゑにありて頰白のさへづる春となりにけるかも



齋藤茂吉
歌人
醫師
醫學博士
帝國藝術院會員
山形縣の人
明治十五年生

## 齋藤茂吉

あさ明けて船より鳴れる太笛のこだまはながし竝みよろふ山

高はらの月の光は隈なくて落葉がくれの水のおとすも

石原の涌きいづし湯に鯉飼へり小さき鯉はここに育たむ

奥田正造
教育家
東京成蹊高等女學校長
岐阜縣の人
明治十七年生

奕堂和尚
俗姓平野
曹洞宗管長
總持寺貫首
尾張國（愛知縣）の人
明治十二年歿
年七十五

# 三曉鐘

奥田正造

一日、奕堂和尚は殷々とひゞく曉鐘に耳をすまし、禪定から起つて侍僧を召して、鐘つく者の誰なるかを見せしめられた。侍僧はそれが新參の一小沙彌である旨を歸り報じた。

奕堂和尚は直ちに之を膝下に招いて、「今曉の鐘は如何なる心得で撞いたか」と尋ねられた。沙彌は「別にこれといふ考もなく、たゞ鐘を撞いたばかりであります」と答へた。すると和尚は「いやさうではあるまい、何か心に覺悟するところがあつたであらう。鐘つかばかくこそ、誠に尊い響であつた」といはれた。「別に覺悟といふ程のこともございませんが、國許の師匠が、鐘つかば鐘を佛と心得て、それに添ふだけの愼を忘れて



森田悟由大禪師
曹洞宗管長
永平寺貫首
愛知縣の人
大正四年歿
年八十二

通天
東福寺の異稱
臨濟宗東福寺派の本山
現京都市下京區に在る

鼎洲和尚
臨濟宗の僧
勤皇家
尾張國（愛知縣）の人
明治七年歿
年五十八

はならぬと、常々戒めて下さいましたので、いつものやうに鐘を佛と思ひ、禮拜しつゝ撞いたばかりでございます」と答へた。奕堂和尚はしみ〴〵とその覺悟を賞め、「終生、萬事に處してその心を忘れるな」と戒められた。この小沙彌こそは後年の森田悟由大禪師であつた。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、かほどまで敬虔の念を罩めた古人の心づかひはいかにも尊い。

通天の鼎洲和尚が、一日山門内で松の落葉を一つ〳〵拾つて居られた。これを見た侍者某が、「お手づから一つ〳〵お拾ひになるにも及びませぬ、どうせ只今掃きます故」と聲をかけた。鼎洲はつく〴〵と侍者の顏を見て、「今の言葉は修行する

利休　千利休　名は宗易　茶人　千家流茶道の祖　和泉國（大阪府）の人　天正十九年（一二五一）歿　年七十一

紹鷗　武野紹鷗　名は仲村　茶人　和泉國の人　弘治元年（一二一五）歿　年五十二

人の心得ではあるまい。どうせなどと後をあてにする樣ではいかぬ。一つ拾へば一つだけきれいになるのぢや」と戒められた。掃除は實にこの心でなければならぬ。帚を持つた時にのみ掃除があるのではない。一塵の心にとまつた時、その一塵を取りのけて清淨になす所に、眞の掃除がある。

利休が紹鷗から掃除を命じられたので、露地へ出て見ると、別にこれといふ塵もない。師の仰せを如何にすべきかと考へた後、一樹をゆり動かして飛石に二三の落葉を點じ、師に掃除の成れるを報じた。落葉の趣が、寂びきつてゐて如何にも面白い。紹鷗はこれを見て、この才必ずわが道を成すに足ると感歎したといふ。

加賀侯　加賀國（石川縣）金澤藩主　前田氏

小堀遠州　名は政一　遠州流茶式の祖　伏見奉行　正保四年（一三〇七）歿　年六十九

掃除はたゞ掃き捨てればよいのではない。掃除の跡が大切である。そこに趣がなければならぬ。利休は當然捨てるべきものを生かして趣を出したのである。

加賀侯がその庭奉行を遣はして、掃除の仕方を小堀遠州に學ばしめた時、遠州は「とかくきれいなるは惡し」と教へた。庭奉行は「それでは掃除を致さぬが宜しきものにや」と尋ねると、遠州は笑つて「きれいなのでさへよくないのにむさいのは尙更よくない」と答へたといふ。まことに味はふべき言葉である。

（茶味）

武者小路實篤
小說家
帝國藝術院會員
東京市の人
明治十八年生

# 四 師の言葉

武者小路實篤

今の世には、自分の許されただけの範圍を、生かせるだけ生かさうといふものが少い。すぐ、自分に許されてゐない範圍にまでのさばり出たがり、其處までのさばれないといつて不平を起す。自分に許された範圍で、自分を生かせるだけ生かしたら、存外自分を生かすことが出來るのだが、それを知らない。そして、自分に許された範圍で出來るだけ自分を立派に生かしたものは、必ず自分の求める世界を必要なだけ獲得してゆけるものだといふことを信仰しない。それは、自分の人格を立派にしようとは思はずに、富貴をのぞむからだ。

しかし一方、人間に與へられた才能を十分に發揮出來るやうな世の中にしたいといふ心がけを絶えずもつことは必要だ。この二つは、決して仲のわるい兄弟ではない、むしろ、お互に助けあはなければならない兄弟だ。

日常生活の美しい人、他人を責める前に自己を反省し、心を常に道からはなさないやうにつとめ、少しでも自分が賤しい心になると氣がとがめて、改めないではゐられない人、その人は人類の寶だ、自分のうちにある人類に與へられた寶を掘り出す人だ。

かゝる人は、いつか人類のほこりになる。その人は、そばにゐる人の心を高め、清め、人類に對する希望を取りもどす人だ。

大國主神　大己貴命　出雲を中心に國土を經營された神　官幣大社出雲大社の祭神

重荷を背負つて歩くと、きつと大國主神を思ひ出す。同胞につかへてゐる氣持だ。苦しい、實に苦しい。自分だけが同胞の爲に苦しんでゐるやうな氣がする。なぜ自分だけが苦しまなければならないのだ。そんな氣さへする。しかし、何か自分以上のものがゐて、どうしても荷を目的地まで背負はないでは許してくれない。大國主神は、皆におくれて一人苦しんで歩いてゐた。だから哀れな兎にも思ひやりが出來たのだ。

とにかく、大國主神は重荷を負ふ神樣で、空手の神樣でなかつた。だから重荷を負ふ時、始めてあの神樣のありがたみがわかるのだ。默つて、あとから、重荷を背負つて、一足々々全身の力を入れないと歩けない姿は美だ。自分は重荷を背負つて歩く時に、あの平和な忍耐強い神を思ひ、勇氣と慰めとを得る。

この世を假の世の中とするにはあまり美しすぎる。空の色、水の色、草木の色、それ等の美しさは無限を思はせる。この美を本當に知れば、我々は、自分達がこの世に人間として生まれたことの幸福を感じないわけにはゆかない。

この世には美しいものが多すぎる。多すぎる爲に、我々は無頓著になる傾がある。しかし、この無限の美しさを感じることが出來ないやうにこの世がつくられてゐたら、或は人間がつくられてゐたら……さう思ふ時、自分はこの地上に生まれたことを感謝する。

（幸福者）

新井白石
名は君美
德川幕府の儒官
將軍家宣・家繼の輔佐
江戸の人
享保十年（一三八五）歿
年六十九

板倉勝重
德川氏譜代の重臣
京都所司代
寛永元年（一二八四）歿
年八十
天正十六年
一二四八年
後陽成天皇の御代
德川殿
德川家康
駿河の國府
現靜岡市

# 五　板倉父子

新井白石

## 板倉勝重

天正十六年、德川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中を擇び給ひて、勝重して此處の町奉行に任ぜらる。

はじめ勝重を召され、此の職の事仰せ下されしが、其の任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、更に御許しなし。勝重「さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものと謀りてこそ御返事をば申すべけれ」と申す。德川殿笑はせ給ひて、「さもありなん、罷り歸りて相謀れ」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悅ぶべき事ありと告げ知らする人あり。如何なる幸や候」といひけるに、勝重物をもいはずほくそ笑みて、衣裳ぬぎ捨て座になほり、妻に打向かひ、「されば今日召されしこと、餘の儀にあらず。此の度御座所を移さるゝによつて、彼の町の奉行たるべきよしを仰せ下さる。如何にも叶ふべからざる旨を辭し申せども、御許しなし。さらば我が家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことは如何にや思ふ」といふ。

妻は大いに驚きて、「あなあさまし。私事などならば、夫婦はかるといふこともこそあれ、公にてかゝる事や宣ふべき。まして是は仰せ下さるゝ所なり。殊に其の職に堪へん堪へじは御心にこそあるべけれ。みづからいかで知り候べき」といへば、勝重、「いや〳〵、我此の職に堪へん堪へじは、我が心一つのみにあらず、御身の心によることにて侍るぞ。まづ心を靜め

てよく聞き給へ。古へより今に至り、異國にも、本朝にも、奉行頭人などといはるゝ者の、其の身を失ひ、其の家を亡さぬは稀なり。或は內緣に就いて、訴を斷ること公ならず。或は賄賂に因つて、理を判かつこと私多し。これらの禍は婦人より起る所あり。我若し此の職奉らん後は、親しき人のいひよらん事なりとも、訴訟のこと執し給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候ことありとも、苞苴の物受け給ふまじきか。これらの事を初として、おことは勝重の身の上、如何なる不思議の事ありとも、さし出てもののたまふまじき由固く誓ひ給はざらんには、勝重此の職に任ずることは如何にも叶ふべからず。さればこそ御身と謀るべしとは申したれ」といふ。妻つくづくうち聞きて「誠にのたまふ所ことわりにこそ侍れ。みづから



は如何なる誓をも立てなん、とく參りて畏まらせ給へ」といふ。勝重大いに悅びて、神にかけ佛にかけて、かたき誓たてさせて、「此の上は思ひ置く事なし。さらば參らん」とて、衣裳ひきつくろひて出づ。袴の後腰をもぢりて著たり。妻うしろざまに見て「袴のうしろあしう候」といひて、立寄りてなほさんとす。勝重聞きもあへず「さればこそ我が妻に謀らんと申しし過たざりけれ。勝重が身の上の事、如何なる不思議ありとも、さし出て物いはじと誓ひしは今の程ぞかし。早くも忘れ給へりな。此の定ならんには、勝重職承ること叶ふべからず」とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまざまの怠狀まゐらす。「さらば其の言葉、いつまでも忘れ給ふな」といひて、御前に參る。德川殿「如何に、汝が妻は何とかいひし」と仰

慶長六年　二二六一年
後陽成天皇の御代
加藤喜左衛門　名は正次
德川家康の臣
六條　現京都市下京區の內
本願寺　東本願寺
淨土眞宗大谷派の本山
大御所　德川家康
關ヶ原合戰　慶長五年美濃國（岐阜縣）關ヶ原に於て德川家康と石田三成等との間に行はれた戰
豐臣家　豐臣秀頼

せければ、「妻にて候ものが、愼みて承れと申し侍る」と申す。「さこそはあらめ」とて、大いに笑はせ給ひしとなり。

天正十八年關東へ移り給ひても、職もとの如く、慶長六年の春、京都に所司代を置き給ふべきにて、勝重竝びに加藤喜左衛門を擇びて上せらる。加藤は六條にして、本願寺の寺地を賜ふ時に、私の事ありとて罪蒙る。其の後は勝重一人職に在り。同じき八年二月、大御所、將軍宣旨を御拜賀の時、從五位下に敍し、伊賀守に任ず。此の頃は關ヶ原合戰の後、天下草創の初にて、士も民も威にのみ服して、いまだ德に懷かず。まして豐臣家京近き程にましまして、都鄙のうちさすが昔を偲ぶ者のなほ少からず、人の心も定まらず。上は一人より三公・九卿・諸衛・百司の事を執し、下は神職・寺務・農工・商賈の事に至るまで、悉く

大坂の兵　慶長十九年の大阪冬の陣及び翌元和元年の大阪夏の陣
德川家康と豐臣秀頼との間に行はれた戰
板倉重宗　勝重の子
京都所司代　明暦二年（二三一六）歿年七十一

皆此の職にすべ司どる。いふばかりなき要劇の職なれど事一つとして淹滯なく、物一つとして廢缺なく、天下皆其の能を稱せずといふ者なし。大坂の兵再びまで起りしにも、勝重かくて在りければ、王城のうち動きなく、叡慮も殊に安かりけり。

## 板倉重宗

周防守重宗は勝重が嫡男なり。此の人の職にありし時の名譽、天下の稱する所、また擧げて數ふべからず。

重宗職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にして遙かに拜する事ありて決斷所に到る。此處には茶磨一つをすゑ置き、明り障子を引立ててその內に坐し、手づから茶ひきながら訴を聞き分かつ。人みな此の事どもを不審しあへり。されども、問ふことも得ならず。遙か年經て後問ふ人

愛宕の神　愛宕神社　現京都市右京區の愛宕山に在る

ありしに答へて曰く、「まづ決斷所に出づる時に西面の廊下にて拜する事は、愛宕の神を拜するなり。多くの神の中に、殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きし程に、所願ありてかくは拜しぬ。其の所願といふは、今日重宗が訴を斷らんに、心に及ばん程は私の事あらじ、若し過ちて私の事あらんには、たち所に命を召され候へ、年頃深く賴みまゐらする上は、少しも私心あらんには世に永らへさせ給ふなと、日毎に祈誓するにて候。また訴を判かつことの明らかならぬは、我が心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は自ら動かさざらんやうこそあらめど、重宗それ迄の事は叶ひ難し。たゞ、我が心の動くと靜かなるとを試みるには、茶をひきて知る。心定まりて靜かなる時は、手もそれに應じて磨の環ること平かにして、き



しられて落つる所の茶、如何にも細かなり。茶の細かに落つる時に至りて、我が心も動かぬと知り、其の後やうやくに訴を判かつ。また、明り障子を隔てて訴を聞くことは、凡そ人の面貌をうち見るに、憎さげなるとあはれがましきとあり、誠しきあり、かたましきあり、其の品多くしていくらといふ數を知らず。見る所の誠しきと思ふ人のいふ事は誠と聞かれ、かたましきと見ゆる人のなす事は、何にても皆詐と見ゆ。又、あはれがましき人の訴は、まげられたる所あるよと思はれ、にくさげなる人のあらそひは、ひがごとならんと覺ゆ。これらのたぐひは、我が目に見る所に心の移されて、彼が言葉を出さぬうちに、はや我が心の中に、邪ならん、正しからん、曲らん、直からんと思ひ定むる程に、訴の言葉を聞くに至りては、我が思ふ方に其

の事聞きなすこと多し。訴のなるに及びては、あはれがましきにくむべきあり、にくさげなるにあはれなるあり、誠しきに僞りかたましきが多きこと、此のたぐひ殊に多し。人の心の知り難き、容を以て定めんこと叶ふべからず。古への訴を聞くには色を以て聽くことあり、それは覆はるゝ所なき人の事なるべし。重宗が如きは、見る所につきて心覆はるゝこと多し。また、さなきだに訟の庭に臨んでは恐しかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせくて、おのづからいふべき事も得いはで、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮、互に面を見も見られもせぬには若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候」と答へしとなり。

（藩翰譜）

藩翰譜
十三卷
諸侯の傳記錄
元祿十五年
（一三六二）成

P31－P68

高濱虛子
名は清
俳人　小說家
帝國藝術院會員
松山市の人
明治七年生
上野の森
東京市下谷區
上野公園內の森
根岸
同區上根岸町
上野公園北方
臺下の地
正岡子規の寓居根岸庵が在つた
彼
正岡子規

## 六　柿一つ

高濱虛子

ランプの光は靜かに更けて行つた。時々上野の森に反響して轟き過ぎる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋しかつた。

日によつて不定ではあるけれども、此の頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜中頃から再び上るのではあるが、其の平熱になつた時の心持は、流石にすが〳〵しかつた。病主人の頭はさういふ時に一層透明になるのであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判斷を數限りない句の上に下すことが出來た。句の良否は色の黑白の如く明白に、一見して立所に判斷することが出來た。自分で自

分をあやしむ位に、それが容易で且迅速であつた。

彼の淋しい家庭には、六十を過ぎた老母と、今年二十七になつてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる母も、嫁期を失した妹も、唯主人の病を看取るために生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳を敲てながら、各、默つて針を運んでゐた。

やがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは、病主人の枕許に、盆に載せた柿を運ぶためであつた。

「もうこれきりかい」と、彼はながし目に其の盆の柿を見ながら聞いた。

「昨日あんなにお食べたから、もうこれきりよ」と妹は答へた。盆の上には只二つしか載つてゐなかつた。





彼は凡てのものに健啖である中に、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

彼は忽ち食指が動いたのだが、只二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業―投書函の一掃―が完了した時の慰藉の料に取つておかねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。

「選がすんでしまつたら、此の柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片附けてしまへ」と。かくて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬きもせずに冴え渡つた。傍の火鉢に炭の繼がれたことも、時計が十二時を打つたことも、老いたる母の寢牀に就いたことも、彼は知らぬではな

かつたが、それらは餘り深く彼の注意を惹かなかつた。妹が牀にはひつたのはそれから一時間も後であつたが、それは、其の物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつふせつたともわからぬ位ひそやかであつた。

靜かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の眼は燈火に光り輝いて、此の夜の色の中にひとり王者のやうな威を示してゐた。

最後に手に當つた草稿を見終つた後、彼は念のため投書函をかき探して見たが、もう其處には一枚をも留めなかつた。彼は朱筆を投げ棄てたまゝ、兩手で頭を抱へて、暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片附けてしまつた慄へるやうな滿足の情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐





とで、彼の心は暫く搔亂されてゐた。が、やがて其の頭を抱へてゐた手をほどいて蒲團の外に現した彼の顏は、いよ〳〵興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頰のあたりの赤みは色を增してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思はなかつた。燈火を中心とした此の「病牀六尺」の天地は、今は何者にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界のやうに思はれた。今や彼の體溫は再び上つて、其のためにいつもの、酒に醉つたやうに興奮した心持になつてゐるのであるといふことには、氣がつかうともしなかつた。

彼は樂しげに盆の上の柿を見遣つた。柿の赤い色は媚びるやうに輝いてゐた。抑へてゐた彼の食慾は猛然として振

京都伏見の桃山　現京都市伏見區桃山町
愚庵　俗名天田五郎
禪僧　明治三十七年歿　年五十一
天龍寺　現京都市右京區嵯峨に在る臨濟宗天龍寺派の本山　京都五山の一
滴水和尚　俗名由理宜牧　臨濟宗の僧　天龍寺管長　丹波國（京都府）の人　明治三十二年歿　年七十八

るひ起つた。彼は餓ゑた虎が殘忍な眼を光らせて兎を摑むやうに、忽ち其の柿の一つを取りあげて、皮をむき始めた。

此の柿は、京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た、釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さういへば、形がどこか釣鐘に似てゐた。此の禪僧といふのは、維新の戰亂に生死不明になつてしまつた父母と妹の行方を何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたことが動機となつて、中年から天龍寺の滴水和尚の鉗鎚の下に僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、此の禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌をよくし、又書に巧みであつた。それらの關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、



桃山の草庵に禪師を訪ねた人が、其の庭前の柿を託されて、遙遙と携へ歸つて彼の病牀に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭に在る間に、彼はもう辛抱が出來なくなつて、其の柿を三つ續けざまに食つた。其の人が歸つて後も、夜寢る迄に十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたのは、其の殘りの唯の二つであつた。

彼は其の一つを取つて、皮をむくより早く、忽ちそれにむしやぶりついたのであつたが、もう大方食ひ盡くして蔕の所に達した時に、少し顏を顰めた。それは稍澁かつたのであつた。さういへば、昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓著せずに、其の蔕の際まで少しも殘さずに食つてしまつた。

其の帶の所の澁いといふことが、少からず彼の興味を惹いた。さういふありふれた事柄を、恰も天下の大事の如く考へながら、彼は又次の柿をむいた。今度の柿も同じく帶の所が少し澁かつた。

此の時彼は、畢竟澁い位の柿でなければ旨くないのだといふ結論に達した。此の、澁くない柿よりも澁い柿の方が旨いといふ結論が、又彼を喜ばせた。

二つ共に食ひ盡くしてしまつて後、彼は盆の上にむき捨てある皮を取りあげて、其の皮に附いてゐる肉を少しも殘さぬやうに前齒でかじり取つた。しまひには其の皮をも少しばかり食つて見た。それは餘り旨くはなかつた。

彼は暫くぼんやりとしてゐたが、どうも此のまゝ寢る心持にはなれなかつた。枕許の硯を引き寄せ、卷紙を展べて手紙を認めた。彼は其の手紙を讀み返して、狀袋に納めて後、漸く眠に就くべく用意した。ランプを細めて枕に顏を埋めた。

幽かな鼾が隣の室から聞えた。

頭の興奮は容易に收りさうにもなかつた。彼は強ひて眠らうとして眼をつむつたが、心はまだ今日の仕事の上に彷徨つてゐた。

三千の俳句を閲し柿二つ

（高濱虛子全集）

愚庵
俗名天田五郎
號は鐵眼
禪僧
福島縣の人
明治三十七年
歿　年五十一
九月二十一日
明治二十六年
九月二十一日
師の坊
滴水禪師
嵯峨
現京都市右京
區嵯峨

# 七　巡禮日記

愚　庵

九月二十一日　支度調ひければ、師の坊端近く立出で給ひ、「さても如何なる樣子して行くやらん、我にも一目見せよ」と仰せらる。有難き御事なり。人々門前にて別れを告ぐ。嵯峨の惠參屢、西國せしとて、道中の事いと委し。「夜路は必ずしたまふな。上り坂には袱子を逆に掛け給へ、常の掛けやうにては膝に障りて歩み難きものぞ」など、懇に教ふ。牧田和尚・法弟元策等、草鞋はきて送り來る。今日は四里餘。

同二十三日　今日は彼岸の中日にて、昨日の雨名殘なく晴れ、何處の里も賑々し。偖、袱子は、初め四貫目に餘りしを、門出の日、二里の道に兩の肩を腫し、山川かけて永の旅路に堪ふべくも覺えねば、著替への類悉く省きて、二貫目許りとなしぬ。されど四日目といふ今日は、肩の痛み強く、これさへ中々持ちあぐみたり。夕暮に土山の里に著く。けふは九里半。

土山
滋賀縣甲賀郡
土山町

十月八日　今日も天氣よし。足の腫やゝ癒ゆ。衣類洗濯して、いと心地よし。

十一月四日

大空は明けそめぬらし百鳥の塒を出づる聲の
さやけさ

床の内に塒立つ鳥の聲を聞き、そゞろに心浮きたちて、いそ

不動坂　和歌山縣伊都郡高野町に在る
神谷　高野町の内
九度山　伊都郡九度山町
慈尊院　九度山町に在る眞言宗の寺
弘法大師　空海　我が國眞言宗の開祖
高野山　古義眞言宗の總本山金剛峯寺の寺界
奥の院　奥の院谷
芭蕉　松尾芭蕉　名は宗房　蕉風俳諧の祖

いそと支度し、亭主が供養したる草鞋を穿き、新晴に乘じて不動坂より下る。宿雲谷に滿ちて、山はその巔を露し、嵐氣、面を撲ちて、一徑寂寞たり。

神谷を經て九度山に下り、眞田幸村が佗住まひの跡を尋ね、慈尊院に詣づ。こゝは弘法大師が、母刀自の尼を住ましめ給ひし處なり。高野山の奥の院にて見たる芭蕉の句に、

父母のしきりにこひし雉子の聲

とありしを、昨日はさまで心にしみても感ぜざりしが、今思へ

高野山芭蕉句碑



丹生四社　丹生都比賣神社　伊都郡天野村に在る官幣大社
祭神丹生都比賣神外三座
紀の川　紀伊川　奈良・三重兩縣界に發源し奈良・和歌山兩縣を流れて紀伊水道に注ぐ
大悲呪　千手千眼觀世音大悲心陀羅尼
千手觀音の内證の功德を說いた呪
開甘露門　亡靈供養のため施餓鬼會等に讀誦する呪

ば、誠に名句なり。この上に丹生四社の祠あり。參詣して下り、三度、紀の川を北へ渡る。渡し守、年はやう〳〵十六七歳、何事か打案じたる體なりしが、やがて袂より柑子のやゝ色づきたるを二つ取り出し、跪きて我に供養せんとす。その樣の殊勝さ、賤しき者の子とも覺えず。「親ありや」と問へば、「今日は母なるものの命日にこそ」とさしうつむく。「あな不便、我、讀經して得さすべし」といへば、手を合はせてうち拜む。大悲呪・開甘露門等を回向す。嗚呼、芭蕉の句はいよ〳〵名句なりけり。けふは七里。

我が袖も濡れこそまされたらちねを戀ひ渡す
子が櫂の雫に

石山寺　大津市石山に在る眞言宗の名刹

良辨僧正　華嚴宗の高僧　寶龜四年（一四三三）歿

月堂　奈良市雜司町に在る華嚴宗の總本山東大寺の佛堂

義淵僧正　法相宗の高僧　神龜正年（一三八八）歿

同十八日　きのふの雪、午後は雨となり、夜一夜降りて、今朝晴る。粥坐して下山し、第十三番石山寺に著きたるは十時頃なり。山門を入れば、兩側の紅楓、今しも盛りなり。宗旨は眞言宗、本尊は如意輪觀音、開山は良辨僧正と聞え給ふ。この僧正は、二歳の時、鷲にとられ、奈良の二月堂の杉の枝に掛り給へるを、義淵僧正に育まれ、三十餘年の後、生みの母に廻り遇ひ給へりとなん。我が父母も世におはさば、如何に戀ひしと思すらん。あはれ、昔の因緣にあやかり、何時か我にも廻り會はしめ給へと祈念しつゝ納經し、札を打つ

石山寺





勢田の唐橋　琵琶湖尻の瀨田川に架せられた橋　近江八景の一

伏見　現京都市伏見區の內

月見堂　石山寺の堂　瀨田川に臨む

源氏の間　石山寺の本堂內に在る　紫式部が源氏物語を書いた部屋と傳へる

とて、

まさきくておはせ父母御佛の惠の末にあはざらめやも

執事の坊に行き、今宵の通夜を賴みけるに、異議なく承引しければ、門前の旅亭にて夕暮まで休息す。此處は湖水の落ち口なれば、水漸く狹く、流れを隔てて山に對し、左の方には勢田の唐橋を眺め、景色好き所なり。一昨日、伏見の愚逸が許にて貰ひ來れる餅など取り出で、粥にして點心し、暫しまどろむ。夕日の影、唐橋の上に殘る頃、藥石して再び登山し、尙此處彼處と歩みて月見堂に至れば、宵月の光、川波に映りていと面白し。やがて堂に入り、源氏の間の後にて通夜す。けふは一里半。

林丘寺 現京都市左京區に在る臨濟宗の寺

同二十二日　元策、林丘寺より師の坊の御使として來る。

一　胡麻味噌

一　十六海苔の煮染

一　淺草乾海苔

この品々は點心の添物にせよとの御事なりと、前に押竝ぶ。あなかしこ、かひなき身をも御心に懸けさせ給ふかや、有難き事どもなり。元策、又一包の金子を出し、これはこの頃東京より接心の爲登山せる居士達が志の供養、預り參りぬといふ。取りあげ見れば、

一　金參圓　江川鐵心居士

一　金貳拾錢　同　妙音禪子

一　金五錢　內田鐵針居士



頂法寺 現京都市中京區に在る天台宗の寺

道中にて至極不便の者見當り候はば分かち與へ下され度候

と目錄の端に書きつけたり。さても奇特の人々かな。とかくして午も過ぎければ、元策と別れ、第十八番頂法寺の六角堂に參る。けふも天氣よし。

十二月十八日　明方に參詣ありと覺しく、堂の扉前に人のけはひす。立出でて見れば、一人の男、賽錢箱の前に蹲りて祈念する體なりしが、己を見て、つと驅け寄り、法衣の袖にすがり、うちつけに車に乘れと勸む。何事とも得知らねば唯呆れてゐたりしに、益〻言ひ募りて、はては手を合はせて拜むなどいよいよ狂人の體なり。とかくする間に、堂司聞きつけて出で來

赤坂　岐阜縣不破郡赤坂町

り、「法師に向かひて無禮なせそ」といへば、「あら物體なや、我いかで無禮すべき」と俄に畏まる。　靜かにそのいふ所を聞けば、妻なるもの久しく病み伏しけるが、觀世音に祈願して本復したりしかば報恩の爲、妻は西國巡禮に打立ち、その身は人力曳なれば、一年の間、月の緣日に供養として巡禮を曳かんと立願し、今年一月より始めて、今月今日が正に滿願の日なり。　夜前參籠せる巡禮法師ありと聞き、下向には必ず供養せんと待ちゐたるなり」といふ。　己は車馬には乘らざるが心願なれど、かゝる奇特の人の誓願を成就せしめんには如かじと、終に承引す。男、涙を流して打歡び、走り出でて支度す。

堂司いふ、「彼の男は、赤坂の在に片山の庄三郎とて、かくれなき善根者なり。　いと貧しけれど、正直にして貪ること無ければ、人皆彼を正直庄三と呼べり」など、委しくその素性を語るを聞けば、尙奇特の事ども多し。　京を出でて九十日、始めて車に乘る。　四里許りにして男の家に至る。　昔はめでたく暮したるならん、構へ廣き家の住み荒したる、目も當てられず。　總領の子とて十歳になれるが、六七歳の弟と微かに焚火して留守したり。「子は二人か」と問へば、「今一人の末の子は、女房が背負ひて巡禮に出で、いまだ歸らず」といふ。　見るも哀れ、聞くも哀れなり。　されば鐵心等が志の鳥目、猶一圓餘り殘れるを、悉く與へければ、押返し、「巡禮には報謝をこそせめ、芳心受けんは本意ならず」といふを、強ひて與へて立出づ。　男いふ、「法師、車を嫌ひ給はば、身一つ暫し御供に具し給へ」と。　袱子を引取り、「同じ樣に掛けんは憚あり」とて、包みて背負ひ、赤坂の南に、東照宮が

東照宮　德川家康

勝山　赤坂町に在る
安樂寺　勝山東腹の寺
熊坂長範　義經傳說中の賊魁
垂井　不破郡垂井町
逢坂山　大津市の南方に在る
知るも知らぬも　これやこのゆくも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關（蟬丸）
山科　現京都市東山區山科
澁谷越え　山科から清閑寺への山路
清閑寺　眞言宗の名刹　現東山區に在る

關ケ原の合戰に本陣据ゑ給ひし、勝山といふに案内す。小さき岡なれども、上には八九段の平地あり、八方を見晴して、形勝の地なり。此處に安樂寺といふ淨土宗の寺あり。又平治の戰に打負け、痛手負ひ、父義朝の介錯に空しく成り給ひし太夫進朝長の墓、又熊坂長範が夜擊ち仕損じて最期を遂げし處など、委しく案内して垂井に至る。尙、今宵の宿りまでは行かんといふを押止めて立別れ、關ケ原に宿る。けふは十里餘り、雪融けにて路あし。

同二十一日　今朝は早や心もせかず。靜かに宿を立出でて、彼の逢坂山に、「知るも知らぬも」と詠みにし人の跡を訪ひ、山科より澁谷越えして、歌の中山清閑寺に六條天皇高倉天皇の

小督局　高倉天皇の宮女
清水の草庵　現東山區清水の產寧坂附近に在つた
羯南　陸羯南名は實　評論家　青森縣の人　明治四十年歿　年五十一

御陵を拜し、小督局の舊跡を弔ひなどして、午のさがりに清水の草庵にぞ歸りける。彼岸の入りの日に立出でて、冬至の今日まで、日を重ぬること九十三日、里程凡そ四百里に餘れり。苔蒸したる庭に早梅の七八輪咲きたるは、主人の歸庵を待つに似たり。留守に羯南が寄せ置きたる句あり。

旅僧の心やすげや冬木立

近隣の人々追々訪ひ來りて、かにかく長途の無事を祝す。いと心うれし。けふは三里。

（愚庵全集）

正岡子規
名は常規
俳人　歌人
松山市の人
明治三十五年
歿　年三十六

筑波
筑波山
茨城縣筑波・眞壁・新治三郡の界に在る

法隆寺
法相宗三大本山の一
奈良縣生駒郡法隆寺村に在る

## 八夜長

正岡子規

秋立つとさやかに人の目ざめけり
草花を畫がく日課や秋に入る
秋風や絲瓜の花を吹き落す
雞頭の十四五本もありぬべし
赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺
門を出て十歩に秋の海廣し





鳥啼いて赤き木の實をこぼしけり
病室や窓あたゝかに秋の蠅
花少し殘れる萩を刈りにけり
末枯の中に花咲く薊かな
山門をぎいと鎖すや秋の暮
稻妻や一本杉の右左
やゝ寒み灯による蟲もなかりけり
長き夜や障子の外をともし行く

生徒志願者成績證明

生徒志願者



徳冨蘆花
名は健次郎
小説家
熊本縣の人
昭和二年歿
年六十

## 九　凩

徳冨蘆花

今日の風こそ、凩の初なれ。

空を見るに一點の雲なく、天心より地平線に至るまで青々として水の如く、日色晶々として到らぬ隈なし。而して風は何處よりともなく、いや吹きに吹き來りて、海を荒し、山を騷がし、木の葉を掃ひてやまず。空色、木の葉の響、すべて一種乾ける、枯れたる氣味ありて、秋の深きを思はしむ。

日は凩に吹き落されぬ。眼を上ぐれば、十二日の月、いつか後山の上に出でたり。洞然として未だ光なし。凩の烈しきに、月の光も吹き消されんずる心地せらる。





七時頃、外に出で見れば、月は晝の如く凩の上に冴えたり。地は白々と霜を敷きぬ。樹影深黑に亂るゝ道を踏みて、川口の方に行くに前洲のあたり、雪蛇の斜に走るを見る。月影に白波の寄するなり。

徳冨蘆花

十時頃に至るも凩は猶止まず。海の音、戸障子のはためき、樹梢のうなり、其の間には蛙の聲も混りて屋を繞る。戸を開けば滿天滿地の月色。（十月十七日）

凩は忘れたるやうに止みぬ。先の程まで騷々しく頭を掉

りたりし庭前の櫻樹も畫がける如く靜まりて、枝より枝にひき渡したる蜘蛛の絲の一微顫だに見る能はず。　凪の吹き集めたる落葉は其處に一堆、此處に一積靜かに伏してがさともいはず。

庭に立ちて空を望むに、地平線より天心に至るまで一點の雲なく、晶熒玲瓏、明鏡よりも澄み、碧玉よりも匂やかに、深淵よりも光を含み、名工の鍛へたる秋水よりも冴えたり。　高く深く澄明にして、直ちに上帝の聖座をも見るべき心地す。

今日こそ、眞に秋晩の最も全き日の一なれ。　二日に亙りし大雨の後、二日に亙りし凪あり。　彼の雨もて洗ひ、此の凪もて掃ひ、而して天地は乾々淨々、空はいよ〳〵高く、空氣はいよいよ澄み、日はいよ〳〵明らかに、瑩々として宇宙は一の璧となりぬ。　自然は此の上に完き秋日を與ふる能はじ。（十月十八日）



湘海　相模灣　神奈川縣南部の海

相模灘　相模灣南方の沖合

小坪　神奈川縣三浦郡逗子町小坪

靜かなりし世の中、俄に騷ぎ出でたる心地して、急に立出で見れば、已に凪吹き始めてあり。

今までも紫だちたる紺青の色に湛へゐたりし湘海は、陣々の風に吹き立てられて、尺に一瀾、寸に一波、白く起ち、白く倒れて、相模灘は須臾に白泡白波狂ひに狂ひ、哮りに哮り、滔々汨々としてまさに沿岸一帶の磯山を押流しもて去らんとするの勢あり。　颯々たる風の、波を吹きしぶくを見よ。　濱の眞砂の舞ひ立ちて煙の如く渦まくを見よ。　落葉と共に、小鳥の飛鳴して吹き飛ばさるゝを見よ。　顏を掩へて濱を走り來る漁夫の、弓の如く身を張りて走れども一つ所に止るを見よ。　小坪

の山の黄茅、波の如くに搖らぎ、峯の松、一齊に折れんばかり撓むを見よ。

碧空朗かにして日色晶々たり。富士も相豆の連山も鮮かに灘の彼邊に立てり。何處より如何にして風は吹くぞと怪しまるれど、眼を注ぐ所、海も山も人も草木も自ら持する能はずして、狂奔し悲鳴し動擾す。

吹き續けて夕に近づけば、落日杲々として伊豆相模の山々、富士の高嶺はすべて紫に變じ、三浦半島一帶は赫として火の如く夕陽に燃ゆる間を、相模灘は金濤紫瀾・朱波咆哮して、浩々蕩々の音天地に滿つ。（十二月十三日）

（自然と人生）

相豆　相模と伊豆

伊豆　伊豆國　現靜岡縣の內

相模　相模國　現神奈川縣の內

三浦半島　神奈川縣の東南部に突出する半島





# 一〇 遠望

吉江喬松

國境を繞る山脈が、朝のうちは薄い紺青の色を浮かべて遠く見えてゐるが、正午近くなると、日の光が四方に彌漫し、冷たい空を滑つて山の彼方までも落ちる。空色が淡青になつて、冬ながら幾分伸びやかな氣分になる。と、山は低く地面にひらみつくのか、廣い空の背景の中へ溶け込んでしまふのか、暫くの間、たゞ白つぽい青みがかつた冬の光が、空と大地とに漲つてゐるばかりで、山の存在が氣づかれない。

冬季に於て晝間の靜けさを味はひ得るのは、このやうな日だ。郊外に多い杉林の頂が、眞黑くこんもりしてゐて少しも動かない。黑いこの森の影は、いかにも遠く立ちつゞいてゐ

吉江喬松　號は孤雁　佛文學者　文學博士　早稻田大學教授　長野縣の人　昭和十五年歿　年六十一

る廣漠たる樹海を思はせる。小さな三角形の突起を竝べた森の頂は、何となくもの〳〵しい、恐しい感じを抱かせる。今にも動いて、あの靜寂が爆發したら、如何なる騷亂が起ることかと不安に思はれるが、終日、頂の平な、黑い、廣い面は平調を亂さない。

榎・槻・銀杏は皆落葉し盡くし、細い〳〵枝の先の先まで形骸を露して、冬の日を全身に浴びてゐる。幹より枝枝より小枝と、次第に岐れて行く線の先へ〳〵と視線を辿らせると、微細に入亂れてゐる網細工の、果なき蒼空に向かつて、無限の發展を期するものの如く伸びてゐるのが、いかにも好ましい感じを與へる。何といふ直截さと微細さであらう。梢の尖端は神經の慄へてゐるやうに何物かを感じ、何物かの襲來を受け



て細かに顫動してゐる。

風は忘れたやうに起つて來ない。杉の森でも落葉の林でも、この晝間の靜けさを破るまいとしてゐる。その林の中に飛んでゐる雀までが、なるべく小聲で鳴くやうにして、羽をすぼめて、ひよい〳〵と、枝から枝へ飛んでゐるばかりだ。

百舌鳥か鶫かが、折々思ひだしたやうに、高い銀杏の樹から逆落しに森の深みの中へ飛び下りるが、秋に聽くやうな華やかな、全林に響き渡る雄々しい鳴き聲は決して立てない。林の中へおりても、樹の根元や下草の枯れた中を、何處を當といふこともなく、尾をひいて、のそ〳〵歩いてゐる。

冬の林の中で見る鶯くらゐ、友懷かしげにしてゐるものはない。躑躅のこんもりした大きな藪の日に向いた方に、その

武藏野　東京府・埼玉縣附近一帶の平野
秩父の山　關東平野の西部に横たはる連山
大山　神奈川縣中・愛甲兩郡に跨がる

鳥を一羽見つけたと思つて周圍を見廻すと、きつと、その藪の上か後か三四歩と距たらない場所に第二のものがゐないことはない。鳴き聲は立てない。たゞ同じ場所を、彼方此方飛びちがつてゐるばかりである。

武藏野の森に來る鶯は、秩父の山から野を横切つて來るものと、相模の大山から舞ひ出して來るものとの二種あるが、春先彼等の小さな眼に濕ひを帶び、羽色がつやゝかになり、滑かな聲で歌ひ出すのを耳にすると、明らかに兩者の區別が立てられる。けれど冬の森に來て、默つて戲れてゐる彼等は、けぢめのつけやうがない。たゞ囮を置いて待つてゐると、必ずその產地の同じものが籠のまはりに集つて來る。

日が西に廻つて沈みかゝると、今まで野の果に廣く遠くつづいてゐる森の中に沒してゐたかと思はれる山影が、ありありと浮かび上つて來る。黛色といふのは、この時の山の色をあらはすのに最も適した語だ。富士が黑く紫がかつて見えるといふのもこの頃のことだ。野の果にはつきり浮かび上つて眼路を限る。こんな山脈があつたらうかと始めて氣のつくやうに、果しない眺の武藏野は、限界がついて親しみをます。

夕闇の襲つて來るまでの一時、冷たい薄寒い風、皮膚の目にくゞり込んで行くやうなその風を正面に受けながら、じつと見やると、山の麓まで幾里かの間の丘陵・草原・森の姿がはつきり目にうつつて來る。夕暮の物音はこの山脈に限られて、反響を立てて野に鳴り渡るやうに、一際騷然と聞えて來る。

自分等のやうに、都會の背面をめぐる丘陵の上に住んでゐるものには、この冬の夕方の日の落ちかゝる一時くらゐ、明らかに物象を見極め、さま〴〵な物の音を一時に耳にすることの出來る時は他にない。紫紺の山影が、畫然と空と野の果を限り、總べての物の音を覆ひ包むやうにして背後から迫る。その頃、雜然たる市のどよみは嵐のやうに郊外の丘陵を下から襲ひかゝつて、遠く野の中へ向かつて行くと、野からはまた野の聲が呼應して、混交し、紛亂した物の音は、暫し郊外の丘の周圍、次第に薄暗くなつて來る林の中にどよめきたゆたうてゐる。

血紅色の太陽は、沈み果てた後までも眞紅の雲を長く殘して、容易にその光を消し去らない。晝間は少しの雲も見えなかつた空に、黑い雲が幾重にも出て來るが、それでもこの血を流す紅の雲を押潰す力はない。山の頂の他の箇所は盡く黑雲に包まれても、この紅色雲の下だけは、眞夜中近くまで、紅に照らされて、遠くからはつきり見えてゐる。この血紅色の太陽と、その餘光を止めたこの血紅の雲とは、冬――それも初冬でなければ見られない特色である。

（自然讀本）

夏目漱石
名は金之助
英文學者　小說家
東京市の人
大正五年歿
年五十

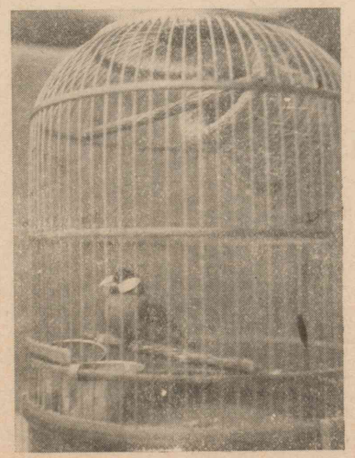
# 一一　文鳥

夏目漱石

目が覺めると硝子戸に日が差してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならないなと思つた。けれども起きるのが大儀であつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とうとう八時過ぎになつた。仕方がないから顏を洗ふ序でを以て、冷たい緣を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて鳥籠を明るみへ出した。文鳥は眼をぱちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら氣の毒になつた。

文鳥の眼は眞黑である。瞼の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫ひつけた樣な筋が入つてゐる。眼をぱちつかせる度に、絹絲が急に寄つて一本になる。と思ふと又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾けながら、此の黑い眼を移して始めて自分の顏を見た。さうしてちゝと鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はぱつと留り木を離れた。さうして又留り木に乘つた。留り木は二本ある。黑味がかつた青軸を、程よき距離に橋と渡して横に竝べた。其の一本を輕く踏まへた足を見ると、如何にも華奢に出來てゐる。細長い薄紅の端に眞珠を削つた樣な爪がついて、手頃な留り木をうまく抱へ込んでゐる。すると、ひらりと目先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を



文鳥

換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持ち直して、心もち前へ伸したかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の眞中あたりに工合よく落ちた。ちゝと鳴く。さうして、遠くから自分の顏を覗き込んだ。

自分は顏を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて、戸棚を明けて、粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、又書齋の緣側へ出た。

無暗に籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手を其の下へあてがつて、外から出口を塞ぐ樣にしなくつては危險だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならない。





自分は餌壺を持つた儘、手の甲で籠の戸をそろりと上へ押上げた。同時に左の手で明いた口をすぐ塞いだ。鳥は一寸振返つた。さうして、ちゝと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。人の隙を窺つて逃げる樣な鳥とも見えないので、何となく氣の毒になつた。

大きな手をそろ〳〵籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏きを始めた。細く削つた竹の目から、嗟いむく毛が白く飛ぶ程に翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を留り木の間に漸く置くや否や手を引込ました。籠の戸ははたりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を眞直にして、足の下に

ある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

其の頃は、日課として小説を書いてゐる時分であつた。飯と飯の間は、大抵机に向かつて筆を握つてゐた。靜かな時は、自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出來た。伽藍の樣な書齋へは、誰も這入つて來ない習慣であつた。筆の音に淋しさといふ意味を感じた朝も晝も晩もあつた。併し、時々は此の筆の音がぴたりとやむ、又やめねばならぬ折も大分あつた。其の時は、指の股に筆を挾んだ儘、手の平へ顎を載せて、硝子越しに吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと、載せた顎を一應つまんで見る。それでも筆と紙が一緒にならない時は、つまんだ顎を二本の指で伸して見る。すると緣側で文鳥が忽ちちよ〳〵と二聲鳴いた。筆を擱いて、そ



つと出て見ると、文鳥は自分の方を向いた儘、留り木の上から、のめりさうに白い胸を突出して、高くちよといつた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を、二三度竪横に向け直した。やがて一團（ひとかたまり）の白い體が、ぽいと留り木の上を拔け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が、半分程餌壺の緣から後へ出た。小指を掛けても、すぐ引繰返りさうな餌壺は、釣鐘の樣に靜かである。流石に文鳥は輕いものだ。何だか淡雪の精の樣な氣がした。

文鳥は、つと嘴を餌壺の眞中に落した。さうして二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟が、はら〳〵と籠の底にこぼれた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。又嘴を粟の眞中に落す。又微かな音がする。其

の音が面白い。靜かに聽いてゐると、圓くて細やかで、しかも非常に速である。菫程な小さい人が、黃金の槌で、瑪瑙の碁石でもつゞけさまに敲いてゐる樣な氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄く混ぜた紅の樣である。其の紅が次第に流れて、粟をつゝく口さきの邊は白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い。左右に振りまく粟の珠も非常に輕さうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに、尖つた嘴を黃色い粒の中にさしこんでは、膨らんだ首を惜し氣もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の數は幾粒だか分からない。それでも餌壺だけは寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分程だと思ふ。



自分はそつと書齋へ歸つて、淋しくペンを紙の上に走らしてゐた。緣側では文鳥がちゝと鳴く。折々はちよ〳〵とも鳴く。外では木枯が吹いてゐた。

夕方には文鳥が水を飲むところを見た。細い足を壺の緣に掛けて、小さい嘴に受けた一雫を大事さうに、仰向いて飲み下してゐる。此の分では一杯の水が十日位續くだらうと思つて又書齋へ歸つた。晩には箱にしまつてやつた。寢る時硝子戸から外をのぞいたら、月が出て、霜が降つてゐた。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

（漱石全集）

岡本綺堂
名は敬二
劇作家
東京市の人
昭和十四年歿
年六十八

源左金吾頼家
源頼朝の長子
鎌倉幕府第二
代の將軍
元久元年（一
八六四）歿
年二十三

修禪寺
現靜岡縣田方
郡修善寺町に
在る臨濟宗の
寺

狩野庄修善寺村
現修善寺町

桂川
田方郡の西部
に發源し修善
寺町を流れて
狩野川に入る

塔峯
修善寺町に在
る丘陵

# 二　夜叉王

岡本綺堂

人物　面作り師　夜叉王　源左金吾頼家
夜叉王娘　桂　下田五郎景安
同　楓　修禪寺の僧

處　伊豆國狩野庄修善寺村桂川の畔、夜叉王住家

時　元久元年七月十八日

藁葺の古びたる二重屋體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門。外には柳の大樹。其の後は畑を隔てて、塔峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を





下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓、門に立ちて人を見送る。修禪寺の僧一人、雪洞を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿（二十三歳）、後より下田五郎景安（十七八歳）頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや、疎忽があつてはなりませぬぞ。

楓、はつと平伏す。頼家主從進み入れば、夜叉王も出で迎へる。

夜叉　思ひも寄らぬお成りとて、なんの設もござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

頼家は縁に腰を掛ける。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形

見に殘さんと、曩に其の方を召し出し、賴家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず、幾度か延引を申し立てて、今迄打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ附けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

夜叉王（歌舞伎舞臺面）

賴家　予は生まれついての性急ぢや。いつまで待てど暮せど埒明かず。餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直き〳〵に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。子細をいへ、子細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござりまする。物體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限り、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一つも無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何卒お察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。その申譯は聞き飽いたぞ。

三島神社　現靜岡縣三島市に在る官幣大社　祭神事代主神

五郎　この上は唯延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

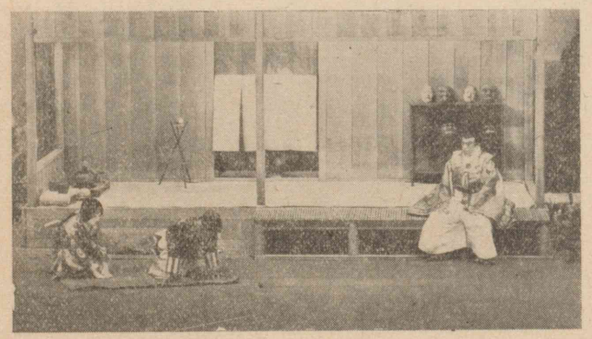
夜叉　その期日は申し上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生無き粗木を削り、男・女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡・邪正の魂を打込む面作り師。五體にみなぎる精力が、兩の腕に自ら湊る時、我が魂は流るゝごとく彼に通ひて、始めて面も作られまする。但し、その時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、われながら確とはわかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿。上樣は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはします。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取留の無い事ばかり申し上げてゐたら、御痔癖が愈募らう程に、こなたも、職人冥利、いつの頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜叉　ぢやというて、出來ぬものはなう。

僧　なんの、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作り師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。伊豆の夜叉王といへば、



顧家と夜叉王（歌舞伎舞臺面）

人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは、いかにも無念ぢや。

頼家　なに、無念ぢやと……。さらば、如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

肩癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引つ取つてあはや拔かんとす。奥より桂走り出づ。

桂　まあ〳〵、お待ち下さりませ。

頼家　えゝ、退け、退け。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は只今獻上いたしまする。なう、父樣。



夜叉王は默して答へず。

五郎　なに、面は既に出來して居るか。

頼家　えゝ、おのれ。前後不揃のことを申し立てて、予をあざむかうでな。

桂　いえ〳〵、嘘僞ではござりませぬ。面は確に出來して居りまする。これ父樣。もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんにさうぢや。昨夜漸く出來したといふあの面を、つそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でな

い。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、その面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、早う。

楓　あい〳〵。

楓は細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂は受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家は無言。心少しく解けたる體なり。

桂　僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家は假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげる。

賴家　おゝ、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣御顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。





飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝゝ。

夜叉　（容を改める。）何分にも我が心に適はぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致し方もござりませぬ。方々には其の面をなんと御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、天晴のものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　天晴との御賞美は、憚りながらお鑑識違、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……。

夜叉　年來數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、この度の面に限つて、幾度打ち直しても生きたる色なく、魂も無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈・怪異なんどの類……。

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。有難く御禮を申されい。





賴家　むゝ、とにもかくにもこの面は賴家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

賴家　おゝ所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。賴家立つ。五郎も立つ。桂、箱を捧げて庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

賴家行きかゝりて物に躓く。

賴家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に雪洞を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し、雪洞を持ちて案内す。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓　お父樣、お見送りを……。

夜叉王、始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

賴家等、相前後して出で行く。夜叉王は起ち上りて暫し默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と緣に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓は驚き取縋る。

楓　あゝこれ、なんとなさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　せつぱ詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは、悔んでもかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を貽さば、一生の名折れ、末代の恥





辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人・上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが卽ち名人ではござりませぬか。拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思し召さば、これから愈精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

夜叉王は答へず、思案の眼を瞑づ。日暮れて、笛の聲遠くきこゆ。

（綺堂戲曲集）

三浦梅園
名は晉
儒者
豐後國（大分縣）の人
寛政元年（一七四九）歿
年六十七

司馬溫公
司馬光
支那宋代の政治家・歷史家
皇紀一七四六年歿

# 一三　誠

三浦梅園

一勺の水を海に入れて、海の水增したりといはんは愚かなり、增さずといふは妄なり。水を加ふる所は我にして、增すと增さざるとは我にあらざるもの、強ひてその辨をもとめずして可なり。我にある所の誠をつくす、是、君子の道なり。

誠とは、うそをいはざる事とのみ心得たらんは愚かなることなり。ある人、司馬溫公に、誠に入る方を問ひければ、「妄語せざるより入る」とぞ答へける。成程、妄りに語らず、うそをいはぬより、誠の道には入るなれども、うそをいはぬばかりを誠とはいはぬなり。僞をいはぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至りて小さきもの



衞
支那春秋時代の一國

靈公
名は元
襄公の子

蘧伯玉
名は瑗
衞の大夫

禮
禮記
二十卷
經書
五經の一

なり。地におとせば目にもかゝらぬやうなれども、內に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隱すべからず、味ますべからず、覆ふべからず。その時いたるに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。その子を水に腐らし、火にやきて、芽を出さずといふは、その子の尤ならんや。これによりて、物の子を實といふは、實は卽ち誠なり。一つも誠ならざるものありて腐りたるものは生ぜず。痛みたるは苗かじく。人の誠も猶かくの如し。

昔、衞の靈公といひし君、夜、夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く音しけるが、闕下にして音なく、闕下を過ぎてまた鳴りけり。靈公、「誰なるべきか」と南子に問ひ給ひければ、「こは蘧伯玉なるべし。禮に、『公門に下り、路馬に式す』といふ事

あり。忠臣と孝子とは『昭々の爲に節をのべず、冥々の爲に行を惰らず』といへり。蘧伯玉は衞の賢人なり。夜なればとて禮を廢てじ」といひけり。靈公、人を遣はして見しめけるに、果して伯玉にてありけり。人知るまじとて欺くは妄なり。四知といひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る、いかでか覆ひ隱すべき。

例へば一升の米、日々に二三十粒を取らんとも措かんとも、知れざるべし。然れども久しく措く時は增し、取る時は減る。草木も、朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さしてかはらぬやうなれども、誠といふもの少しの間斷なき故に、いつ太るともなけれども次第に太るものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、うつくしく照ればこそ、人至りたる時も香清く、色麗しけれ。人の到るを待ちて香を放ち、色を出さんとせば、筈にあふことあるべからず。常々心にかけて掃灑したらん座席と、俄に蜘蛛の網取り、柱拭きたらんとは、いかでか見紛ふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み僞りに文らんは、誠の俄掃除なるべし。

なき名ぞと人にはいひてありなまし心のとは
ばいかがこたへむ

この歌の如く、人をば欺くべけれども、心に心を省みて、いかに今の如く誠ならざる事をばせしぞ、いひしぞ、人をば欺くに、などて自らの心を自らは欺けると咎めたらんには、自ら恥づかしくなり、ひとり居ても額より汗出づべし。

なき名ぞと
なき名ぞと人
にはいひてあ
りぬべし心の
とはばいかが
こたへむ
（後撰集）

畠山重忠
源頼朝の臣
元久二年（一八六五）歿
年四十二
鎌倉殿
源頼朝

北條泰時
鎌倉幕府第三代の執權
仁治三年（一九〇二）歿
年六十
下總國
現千葉・茨城兩縣の内

畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、僞なき旨を起請を以て申し上ぐべしとありければ、「我一生僞をいひしことなし。僞なしと申す上は、この事に限りて起請をば書くまじ」とて、終に書かざりしこそ、勝れていみじくきこえ侍れ。

人は我意のあるものゆゑに、一旦我がいひ出せし詞は、たとひ惡しと案じ當りても、是非にいひ募りて、我を立つるものなり。これ腐ちたる實のごとし。實といふものをうしなひたるなり。常式の者この意あれば、人に憎み疎んぜられ、人の主人・奉行・頭人なんどこの意あれば、人をやぶり國をそこなふ。

北條泰時政を知られける時、下總國のある地頭、領家の代官と相論あり。對決に及ぶ時、領家尤もなる道理申し立てける時、地頭手をはたと打ち、泰時の方に向かひ、「あら負けや」といひ

梅園叢書
三卷
隨筆
安政二年（二五一五）刊

ければ、竝み居ける人々一同に笑ひけり。泰時打聞きて、「いみじくも負けけるものかな、某、代官として久しく成敗しつれども、かゝる事承らず。あはれ、負けぬると聞ゆる人も、かなはぬまでも陳ずる習なるに、前の一通りさもと聞ゆる所、領家の御代官申さるゝ所肝心と聞ゆるにつき、何事なく負け給へる事、返す〳〵もいみじく聞え侍り。正直の人にてましましけり」とて、打涙ぐみ感じ申されければ、初め笑ひける人々は苦り切りてぞ見えける。是によつて、訴論殊更の僻事もなかりけるにこそとて、負け樣を感じ、六年の未進の物、三年まで許しけり。

たとひ、訴論負になり、如何なる事に逢はんとも、僞はいふべからずと、我が心を欺かぬ誠ゆゑ、人をもかくは感ぜしめしなり。

（梅園叢書）

貝原益軒
名は篤信
儒者
筑前國（福岡縣）福岡藩士
正德四年（二三七四）歿
年八十五
禹王
支那上代の帝王
夏の始祖

# 一四　惜陰

貝原益軒

凡そ幼よりつとめ學ぶに、隙を惜しむべし。古への禹王は聖人なりしだに猶寸陰を惜しみ給ふ、いはんや今の凡人をや。いたづらに悠々として空しく時日を費すべからず。光陰箭のごとく、時節は流るゝが如くなれば、年若きを頼んで時を失ふべからず。

人の世にあるは、老幼の時と病する時は學びがたし。又、四民ともにその家のことわざしげくして、もの學ぶ隙は少し。その少き隙を惜しまず、怠りて空しく過ぎ、或は無益の事をなして時を費し、一生をはかなく終らんこと、いと愚かなりといふべし。今年の今日、再び得がたきことを思ひて、かりにもい



常にして云々
常爲ニ而不レ置カ
常行ニ而不レ休マ
者故難レ及ヒ也。
（說苑）
いたづらに云々
出典未詳

人生は云々
人生在リ勤ムルニ、
勤ムレバ則不レ匱シラク。
（蘇頌言行錄）

たづらに時をわたるべからず。是、一生の間心を用ふべきことなり。古人も、「常にしておかず、常に行ひてやまざる者には及びがたし」といへり。又「いたづらに、なすことなく、常に隙多き人は、人にすぐるゝことはなきものなり」といへり。たとへば農人・商人の、つとめて暇を惜しみ、朝夕田を作り、商ふ者は、必ず人にすぐれてその家富みて衣食乏しからず。古人も、「人生はつとむるにあり。つとむれば卽ちまどしからず」といへり。國家の政を精しくつとむれば、その國家必ず治る。學問を精しくつとむれば、必ず諸人にすぐれてその才進む。萬づの事皆しかり。隙を惜しみて久しくつとむれば、成就せざることなし。

それ、人の實は暇に過ぎたるはなし。如何となれば、君子の

聖人は云々
聖人不レ貴二尺之璧一、而重二寸之陰一。（淮南子）

學問をつとめ、國家の政を行ひ、父母・主君に仕へ、諸藝を學び、農夫の田を作り、商人のひさぎ、百工の器物を作り、婦女の布帛を織り縫ふも、皆暇を用ひてなし出すわざなれば、人の最も重んじ惜しむべきこと、暇に過ぎたるはなし。故に、その惜しむべきこと金玉にも過ぎたり。古語にも「聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を貴ぶ」といへり。隙を惜しまざる人は、學ぶこともつとむることもなければ、必ず才智も德行も藝能もなきものなり。暇を惜しまざれば、君子は身を修め家を齊ふること能はず。農工商はその家業を失ひて貧窮飢寒を免れず。學者は必ず粗學にして不才なり。くすしは必ず賤工なり。萬づの道々のたくみも、暇を惜しまざれば必ずつたなし。是、暇は人生の寶にして惜しむべき故なり。





淵明
陶淵明
名は潛
支那晉代の文豪
皇紀一〇八七年歿
古詩
沈約の長歌行
大和俗訓
八卷
教訓書
寶永六年（二三六九）刊

就中、年少の時は、事少く暇多し。精力強く、記憶強く、一たび見聞きて覺えしこと、身を終るまで忘れず。この時つとめ學べばその功多し。故に書を讀むことは、少年の氣力強く、暇ある時よくつとむれば、大いに進みて益あり。三十歳以後は、萬づつとめ多くなりて暇少く、精力やう〳〵弱くなるに隨ひてその覺え衰へぬれば、力を多く用ひても忘れ易く、勞すれども功少し。年少なる人はこれをよく心得て、若き時隙を惜しみ、學問を勉むべし。誠に一生の寶となるべし。淵明が詩に曰く、「盛年不レ重來一。一日難二再晨一。及レ時當レ勉勵。歳月不レ待レ人」と。又古詩に、「少壯不レ努力。老大徒傷悲」といへり。若き時これをよく考へ、後悔なからんことを思ひて、時日を惜しみてつとむべし。

（大和俗訓）

島木赤彦
本名久保田俊彦
歌人
長野縣の人
大正十五年歿
年五十一
八ヶ嶽
長野縣諏訪・南佐久兩郡に跨がる連峯
蓼科山
八ヶ嶽の西北に在る
霧ヶ峯
諏訪郡上諏訪町の北に在る
諏訪湖
諏訪盆地の西部に在る
私の村落
諏訪郡下諏訪町高木

# 一五　湖畔の冬

島木赤彦

富士火山脈が信濃に入つて、八ヶ嶽となり、蓼科山となり、霧ヶ峯となり、その末端が大小の丘陵となつて諏訪湖へ落ちる。その傾斜の最も低い所に私の村落がある。傾斜地であるから、家々石垣を築き、纔かに地をならして宅地とする。最高所の家は丘陵の上にあり、最低所の家は湖水に沿ひ、その間の傾斜面に、百戸足らずの民家が散在してゐる。家は茅葺か板葺である。日用品小賣店が今年まで二戸あつたが、最近三戸に殖えた。その他は皆純粹の農家である。

山から丘陵、丘陵から村落へつゞく木立が、多く落葉樹であるから、冬に入ると、傾斜の全面が皆あらはになつて、湖水から





反射する夕日の光がこの村落を明るく寒くする。寒さがおひおひに加つて十二月の末になると、湖水が全く結氷するのである。

冬の諏訪湖

湖水というても、海面から二千五百尺の高所にあり、村落は湖水よりも尚高い丘上にあるから、嚴冬の寒さは非常である。朝戸外に出れば、鬚の凍るのは勿論であるが、時によると、上下睫毛の凍著を覺えることすらある。かやうな時は、顏の皮膚面に、響き且裂けるが如き寒さを感ずる。

この頃になると、湖水の氷は一尺から二尺近くの厚さに達

する。それ程の寒さにあつても、人々は家の内に蟄して、炬燵に暖をとつてゐることを許されない。晝は氷上に出て漁獵をする人々があり、夜は氷を切つて氷庫に運ぶ人々がある。氷庫といふのは、程近い町に建てられてある湖氷貯藏の倉庫である。

この頃、私の村では、毎朝未明から、かあん〳〵といふ響が湖水の方から聞えて來る。これは、人々が氷の上へ出て、「たゝき」といふ漁獵をするのである。長柄の木槌で氷を叩きながら、十數人の男が一列横隊をつくつて向うへ進む。槌の響で湖底の魚が前方へ逃げるのを段々追ひつめて、豫め張つてある網にかゝらせるのが「たゝき」の漁法である。私の家は、村の最高所にある。庭下の坂が直ぐ湖水に落ちてゐるのであるから、一列の人々を見るには、かなり俯目にならねばならぬ。俯目になつた視線が、氷上の人まで達する距離はかなりあるのであるが、氷上の人の槌を揮ふ手つきまで明瞭に見える。氷を打つ槌先が視覺に達する時、槌の音はまだ聽覺に達しない。次の槌を振上げる頃に漸く槌音が聞える。それで、槌の運動と音とが交錯してくるのである。目に來るものも、耳に來るものも、微かに徹して明瞭である。單にそればかりではない、一列の人々の話し聲までも手に取るやうに聞える。空氣が澄んでゐる上に、村が極めて閑靜であるからである。

村の人々は、又氷の上へ出て、「やつか」といふ漁獵をする。諏訪湖の底は淺くて藻草が多い。人々は、夏の土用中に澤山の小石を舟に積んで行つて、この藻草の中へ投げ入れておく。

土用の日光に當てた石は、寒中の水にあつても、おのづから暖みが保たれると信じられてゐるのであつて、實際凍氷の頃になると、魚族が多くこの積石の間に潜むのである。それを捕へるのが「やつか」の漁法である。「やつか」の所在は、「やつか」を置いた漁人にあつては何時でも明瞭である。氷の上に立つて、湖水の四周から、嘗て記憶に止めておいた四箇の目標地點を求めれば足りるのである。二箇づつ相對する地點を連ねる二直線は、必ずこの「やつか」の上で交叉することを知つてゐるからである。交叉の地點を中心とし

かつや



て、半徑四五尺位の圓を畫して氷を切り取れば、その下に必ず「やつか」の石群がある。圓の面が定まれば、その圓周に沿うて竹簀が下される。魚の逃げ去るのを防ぐのである。かやうにしてから、湖底に積まれた石は、「まんのんが」と稱する柄の長い四つ齒の鍬によつて、一つづつ氷の上へ掬ひ出されるのである。掬ひ出された石は、濡れるといふよりも凍つてゐるといふ方が適當である。水面を離れる石が氷上に置かれる頃は、もうから〳〵に凍つてゐるからである。凍つた石が黒山を成して氷の上に積み上げられる頃は、「やつか」の底には青藻と共に搖れ動いてゐる魚族がある。日が差せば水底に簇り光る魚の腹が見える。魚族は逃場を失つて竹簀に突當る。竹簀には、所々に魚を捕へるための「うけ」といふものが備へつ

けられてある。これは、一旦これに入つた魚の二度と外へ出られぬやうに備へられた竹籠であつて、魚族は終りに多くこの「うけ」の中へ入つてしまふのである。

朝早く氷上に立つてから、「うけ」の中へ魚が納るまでには、短い冬の日が一ぱいに用ひられるのであつて、竹簀をあげて魚を魚籃（びく）の中へ捕り入れる頃は、日はもう湖の向うの山へ傾いてゐるのである。湖面を吹く風は、障るものなき氷上を一押しに押して來る。「まんのんが」を持つ手は時々感覺を失はうとするまでに凍える。その時には、携へた火鍋の中で、用意の榾木を焚くのである。或は又氷の上で直接に藁火を焚くことがある。氷の上で焚火をしても、その氷が解けてしまはぬ程に氷が厚いのである。大凡周圍四里半の氷上にあつて、漁





人の生活は全く世の中との交渉を杜絶する。

「たゝき」で捕つた魚も、「やつか」で捕つた魚も、所謂氷魚であつて、脂が乘り肉が締つて甚だ佳味である。併し、その佳味は、これら漁人の口に入ることは稀であつて、多くは隣の町へ運ばれて、多少の金と換へられるのである。

氷切りの作業は、快晴の夜を擇んで行はれる。溫度が低下して氷の硬度が增すからである。これは若者でなくては到底堪へられぬ勞作である。若者は、宵の口から、藁製の雪沓を穿き、その下に「かつちき」を著けて湖上へ出かける。綿入を何枚も重ねた上に厚い半纏を纏ふので、體は所謂著ぶくれになる。横も竪も同じに見えるといふ姿である。かやうな扮裝をした若者が、氷の上に一列に竝んで、氷を鋸挽きに挽きはじ

める。氷を挽く手元は、初め暗くて後に明るい。氷に眼が馴れるのである。三尺四方程の大きさに挽き離される氷の各片が、切り離されると共に水中に陷る。それが氷鋏と稱する大きな鋏で挾み上げられる。挾み上げられたあとの水には、星が映つて搖れてゐる。大凡一望平坦な氷原にあつて、空は手の屆くやうに低く感ぜられ、星は降る如く光り滿ちてゐる。星の光は、水にあつて水の明りとなり、氷にあつて氷の明りとなり、その明りに全く馴れるに及んで、相隣する人の顏まで明瞭に見えるやうになる。夜が漸く更けて、寒さが益〻加ると、氷原の所々に龜裂の音が起る。その音は氷原を越えて四周の陸地、山地にまで響きわたる。その響の中に立つて鋸を挽いてゐる若者の背中には汗が流れ、暫く立つて休息してゐると、





その汗が背に凍りつくのを覺える。さういふ時は、鋸の手を休めないやうにするのが、唯一の防寒手段になるのである。

御神渡

それ故、若者は唯せつせと切る。腕が疲れると唄も出ない。唯時々睡氣ざましに大きな聲を張り上げるものもあるが、それも長くは續かない。あまり疲れて寒くなれば、氷の上で焚火をして一時の暖を取ることもある。かやうにして、夜が白んで來ると、氷の上に積まれた氷板が山の如くかさなつてゐるのである。夜明からそれを運んで湖岸の田圃に積み上げるので、田圃には、連夜切りあげられた氷板が、長い距離に

瓦つて正しく積み竝べられて、恰も氷の壘壁を築いた如き觀を呈する。積まれた氷には多く筵類を引被せておくのであるが、覆の筵がなくとも、白晝の日光で氷の溶けるといふやうなことはない。海拔二千五百尺の地の如何に寒いかといふことは、これで想像し得るであらう。若者は氷を積んでから、疲れた體を各〻の家に運ぶ。朝飯を食べてから始めて暖い床に入つて、ぐつすりと寐入るのである。

私の村では、又、夜になると、所々の家から藁を打つ槌の響が聞えて來る。氷切りなどに行かぬ人々が、草鞋や雪沓をつくるのである。ひつそりとした夜の村に響く槌の音は、重く、鈍く、底のない響であり、聞いてゐればゐるほど物遠い感じがする。氷叩きの槌の音は、遠くて近く聞える、藁を打つ音は近くて遠い感じがする。

私の村では、又、日中所々の家に機を織る音が聞える。町に行つて買ふ布よりも、絲を仕入れて染めて織る方が安價で丈夫な布が得られるといふのである。縫物をする女は炬燵に居る。機を織る女はそれが出來ない。それで、機臺は皆南向きの日當りのよい室に据ゑつけられる。冬枯の木立に終日響く機の音は、寒いけれども私の村を賑やかにする。どの家の機は今日で何日目であるとか、どの家の機は何日かゝつて織り上つたといふやうなことを、女たちは音を聞いて皆知つてゐる。閑寂な村にあつて隣保相依る心は、機の音までが同情の交流になるのである。

（赤彥全集）

# 一六　北國空

泉鏡花

泉鏡花
名は鏡太郎
小説家
帝國藝術院會員
金澤市の人
昭和十四年歿
年六十七

月令に「冬日は雷、聲を收む」とあれども、北國にては雪雷と稱へて、白きものの降らんとするに方りては、例年必ず雷鳴のあらざることなし。又此の頃を期として、鰤獵の盛なれば、俗に此の雷を鰤起しともいふ。師走中旬、一夜極めて肩寒く足の凍ゆる時、殷々として雷の轟くを聞けば、「もうお正月の音がするよ」と、母は添寢の兒を慰むるなり。

さるほどに寒威一層を加へ、夜は明くれども日光を見ず、淡墨に染まれる明り窓の障子を開けば、黯雲漠々として、灰色の布は一天を包めり。果せる哉、其の夕より霏々として降り積む雪は、一夜にして七八寸、乃至一尺に餘るを常とす。これより先、霜月の上旬より、霰降り、霙落ち、續きて雪降り、五六寸づつも積りては消え、消えては積ること率ね日毎なれば、今更「珍しいものが降りました」といふ者無く、相見る人は眉を顰めて「お寒うございます」と挨拶するのみなり。

天色昏晝として晝も黄昏の如く、甚だしきは日中燈を點ずることありて、手元暗く、裁縫に便ならず、讀書も煩はしく、凡て精緻なる業の碍げられざるはなし。さればとて、杣・土工又、日傭取など、野に山に業を營む者も、雪中は甚だ閑散なれども、かねてかくありと知りて備荒貯蓄を怠らざるが故に、各〻坐食して飢渴を患へず。却りて善く働きたりし者は、平時の勞を慰むるを得べければ、實に冬の日は、北國の住民が永き安息日といふも可ならんか。

彼等が、藁或は板を以て雪垣を結ひ繞らせる薄暗き家に閑居して、つれ〴〵に其の日を暮す間に、兒童はやがて來らんずる「お正月」の希望に輝ける愛らしき顏を、風に曝し、雪に撲たせて、あどけなき聲々に、「雪は一升、霰は五合」と手拍子鳴らして囃しつゝ、兎の如く跳ね廻りて喜べり。

遊戯は雪投げ・雪達磨、或は荒坊主、と稱へて二間有餘の大入道を作る。こは彼等小さき手には力及ばず、突飛なる若者の應援を仰ぐと知るべし。

氷辻りは盛にして、これに用ふる雪下駄なるものは、竹片を茶合（ちやがふ）の如く切りたるに緒をすげたるなり。竹草履とて普通の草履の裏に竹片を結び附けたるもあり。これらを穿ちて堅氷の上を走るに、さながら流るゝ如く、一二町は一息ともいはず瞬間なり。されども、多少の鍛錬を積まざれば、一齒にして踏み辻らし、二三間にして投げ飛ばされ、忽ち巖の如き氷に傷つき、時として其の危害いふべからざるものあり。親たちは口を酸くして此の危險の遊戯を禁ずれども、其の心を知らざる兒輩は、其の忘られざる愉快の爲に、身體髮膚を忘れざるはあらず。

元來、雪の町にては、池の上、田の面など、水ある處もて遊戯の場に充つるにはあらず。五尺・六尺と積れる雪の上に通ぜる唯一條の路は、頻繁なる往來の爲に、恰も普請後の道の踏まれ踏まれて平夷になりたる如くなれば、そのまゝ用ふるに屈竟なり。

されども所用あるものも、此の玉盤の如き雪の道を行かざ

るべからず。足腰の達者なる輩は、氷辷りの呼吸をもて歩むが故に無事なるを得れども、老脚の蹌踉たるは、一支へも支へず覆されて、大怪我を蒙ること屢〻なり。これを防ぐに、庭下駄の後齒に釘を打ちて、雪下駄とて用ふ。こは釘の尖もて、行く行く堅氷の滑かなる面を突き碎きつゝ足懸りを造るなり。或は藁灰を散布して踏むもあり。噫危き哉北國の路、生きながら劒の山を越ゆるなりけり。

兒輩よ、何ぞ早く家に歸らざる。路は明るけれども日は既に暮れんとするなり。御身等の母は、好き物を作りて御身等を待つこと久し。好き物とは何ぞ、鹽鰤の汁是なり。

鰤は冬籠りの佳肴にして、家々に二三尾を購ひつ。久しき貯蓄に堪ふるため強き鹽を施したれば、烘りて其の肉を食ふさへ鼻頭に汗するばかりなり。汁は溫かきが取柄とて、多量の酒の糟をとかして濃きこと宛然とろゝの如きに、件の鹽鰤の肉の殘物を取交ぜて汁鍋の中に刻み入れ、煮立ての湯氣の朦々たるを其のまゝ大いなる塗椀に裝ひ出し、一家打寄りてこれを啜る。晩食の一室には時ならぬ霞棚引きて朧月の趣あり。されば三椀の熱羹に、春風忽ち腸胃に入りて、一夜の春を占むるを得べく、酒量なき婦女たちは、これにも醉ひて面を染むるもをかし。

こゝに最も愛すべきは、雪の夜の炬燵にこそ。雪國の人の家といふ名には、必ず一箇以上の炬燵を含むものと知るべし。

親子・夫婦・兄弟・姉妹、四角八面に押竝びて、隔意なく、作法なく、雜談・笑語、和氣靄々たる家の外に、夜もやゝ闌けて、押詰まりた

應々との句
向井去來

る年の暮ながら人跡やう〳〵絶えて、いと靜かに雪のみ獨り降りしきる時、重たげなる跫音來りて軒下に留りぬ。

やゝありて、下駄の雪を落さんとて、敷居に爪先を打ち當つる音聞ゆ。「只今開けます」と、二聲・三聲内より應ずれども、猶ほとほとと訪ひてやまず。「應々といへど敲くや雪の門」とは實に是なり。

戸をあくる間も遲しと入り來るは、兒輩の常に兩手を擧げて歡迎せる、話上手の伯父さんなり。頭巾も合羽も眞白になりて鷺の如くなるを、家人等箒もて掃ひ落すを待ちて、打笑みつゝ炬燵に進み來れり。

さて彼も團欒の筵に列なりて、兒輩が例の如く「おもしろき物語を聞かせよ」といふがまゝに、咳一咳して徐ろに說き出せり。

「愛らしき兒よ。御身は今伯父が内に入らんとして、しばし軒下に躊ひたりしを知らん。實に予が門口に來りし時、白無垢の衣を絡ひて、同じ一色の被衣を被れる、一個美しき女薦あり。此の家の軒下にイみて、頻りに内を窺ひしが、來懸りし予の姿を見るより、聲を潛めて聞けるやう、『いかに小兒に緣ある人よ、わらはは大雪の夜を籠めて、何處にもあれ幼兒ある家内をば窺ひ歩くをんななるが、ひとり此の家の幼兒は、慈愛深き母が其の袖を以て、ひしと其の行爲を蔽ひつゝ、わらはの目を遮るため、其の善惡を知るに由なし。願はくは御身祕することなく、彼につきての一切を語られよ。賞すべくばこれを賞し、罰すべくばこれを罰せん』と。予は嘗て御身が種々の惡戲

を爲して母を困らすを知りたれば、ありやうに打明けんかと一度は思ひしが、待て、然せんには、彼の女萬、立所に何等かの手段を以て、我がいとしき兒を罪し給はんと、『否、某が甥はよく母の言葉に從ひて大人しく候へば、御褒美をこそ遣はされ度きものなれ』と告げたるに、嬉しげにつことして打頷き給ふと見えつ。 紛々たる雪にまぎれ失せたりし眞白き女萬の姿は、一町ばかり彼方なる、御身が惡戲朋達の門々に朦朧として露れ給ひ、雪垣の邊を行きつ戻りつ、内の樣子を窺ひゐたり。

こは疑ふべくもあらぬ雪女萬なり。 女萬は蓋し白きものの美なる精靈にして、冬季小兒等の賞罰を司どり給ふ神女にこそ。 疑ふを休めよ、御身が父と母と姉と共に、平和なる、幸福なる、此の團欒をなし能ふは、皆この伯父が執成に因りて、善き



幼兒を賞したる、雪の神女が賜なり。」

彼の伯父が所謂雪女萬なるものは、雪の夜に於ける一種の現象なりとす。 元來、雪の大いに積れる時は、幅三四間の道路と雖も、巨蛇蜿蜒、唯一條、人の一人、漸く通行し得べき程の細き雪道のあくのみなれば、夜半往來の人、傍らの雪溜りに踏み込まざらんため、傍目も觸らで足許を見詰めて行く。 眼に遮るは唯銀沙渺々として他に物色を見ざるを以て、素白に眩ぜる視線のふと他に轉ずる途端、眼球に映ずる所の森・家・垣根など、何等かの物體の作用に因りて、橋の上、軒端、山の端、或は松の梢などに、髣髴たる神女の姿を認む、蓋し一種異樣の幻影なり。

（鏡花全集）

# 一七　銀線を描く

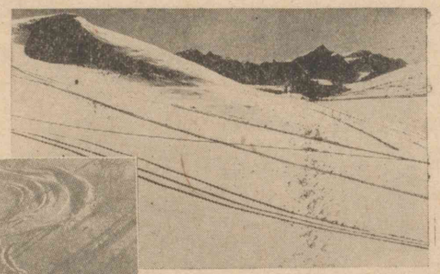
浦松佐美太郎
山嶽研究家
大阪市の人
明治三十四年生

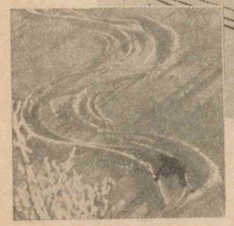
浦松佐美太郎

その刹那、弓を滿月に引きしぼつて矢を放つその瞬間、其處に弓道の醍醐味があるならば、雪の斜面の上にスキーの先を揃へて一氣に滑り下らうとするその刹那、其處にスキーの一切の味がある。

自分の足下から遙かに遠く滑り落ちてゐる雪の斜面を眺めた時、瞳を凝らして自分の飛び下つてゆく一線を雪の上に見詰めた時、雪の魅惑はしつかと心を抑へてしまふ。

スキーを揃へてスタートを切れば、無我の境地である。風を捲き起して飛び下つてゆく壯快さは、見てゐても小氣味がいゝ。立止つて、滑り下つた後を振返る。たゞ一線、雪の上に眞すぐに描き出されたスキーの跡は、幾度眺めても美しい。何の誇張もなく何の飾り氣もない一本の線ではあるが、力強い鮮かな美しさである。右に左に幾つかの曲線を重ねて描き出されたスラロームの跡は、小面憎い程の美しさを持つてゐるではないか。





スキーの滑り跡と（上）直降滑（下）スラローム

スラローム蛇行狀曲線を描く滑り方

雪の斜面を加速度でスキーが滑り落ちてゆく時、雪は珠の樣に舞ひ上る。胸に顏に、霧のやうにぶつかつて來る雪の飛沫。なだらかなカーヴで刳り出されたスキーの尖端は、こんな場合に一番美し

く感じられる。猛烈な速度で飛び去つてゆく雪の斜面に、しなやかなスキーの尖端は見事な彈力で滑つてゆく。そして雪はその兩端から煙のやうに飛び散つてゆく。

粉雪、この雪をどんなに大事に思つてゐるか、スキーの經驗をもたない者には解るまい。雪の魅惑は、スキーによつて始めて深く味はれるのだ。

ピッツ-ベルニーナ　海拔四〇五二米

ピッツ-ベルニーナ附近圖

ピッツ-ベルニーナに登る朝であつた。未だ星の光の強い午前三時に、氷河のほとりにある山小屋を出た。先頭のカンテラが、流れ星の樣に尾を引いて、すうつと滑つてゆく。その光を目あてに、次々にその後を追つて滑つてゆく。夜の寒さに凍つた雪は、雪よりはむしろ砂のやうに感じられた。沙漠の上をスキーで歩いてゆく。カンテラで照らし出された雪は、そんな不思議な錯覺をさへ與へた。夜のほの〴〵明けに、私達と一緒に登つてゐたリーシュは、氷河の割れ目に落ち込んでしまつた。三十分もかゝつて綱でやつと引張り上げた頃には、ベルニーナの頂は、朝日を浴びて薔薇色に輝いてゐた。

ピッツ-ベルニーナ

リーシュ　スウィスの著名な山案内人

ビッツ-パリュー
海拔三九一二米

ビッツ-パリューを下る時は、四千米に近い頂上の直ぐ下の所でスキーを著けて、そのまゝ一氣に滑り下つた。下る道は、一度國境線を越えて伊太利へ出て、そして又瑞西へ引返して來る。二哩に近いパリュー氷河の上の直滑降は、豪壯なものであつた。あんな雄大な景色の中で滑ると、速度の感じが違つて來る。たゞ遠くに見えてゐた山が、急に目の前にそゝり立つて來るのに驚かされるだけで、非常な勢で滑つてゐるといふ感じが少しもない。スキーを止めて後を振返る時、長く長くつながる雪の上の一線を眺めて、始めて滑り下つた距離の長さに驚かされる。そして下つてしまつたのが、如何にも殘り惜しく思はれる。

晴れた日の夕方眞赤な夕陽を浴びながら山を滑り下るのも、嬉しい事の一つだ。雪の上に落ちる影が、鮮かなコバルト色に光つてゐる。

月の明るい夜、氷河の上をスキーで走つてゆくのも面白い。山の陰は死んだやうに黑く沈んでゐる。月に照らし出される山の形は、お伽噺の世界以外にはありさうにもない程誇張されてゐる。聲を立てれば、山が揃つてわめき出しさうだ。人の世界から全く斷ち切られた感じである。

人の熱情は、一度燃え立てば隨分激しい所までゆく。雪の魅惑は、更に奥深く高い山へと人を誘ふのだ。冬の山では、一切が雪の下に凍つてゐる。唯風だけが、氣の向くまゝに到る處に荒れてゐる。冬の山に入つてゆく氣持は、修行の僧が道

場へゆくその氣持にも似通つてゐる。山を求め雪を思ふ情熱が、人をしてこの峻嚴な冬の山にひたすらに向かはしめるのだ。

無邊際の空の彼方から吹きつけて來る冬の山の風、齒に痛い程しみつく冷たさ、併しその味は、新鮮な林檎のやうに爽やかだ。

雪煙を上げて、山から谷へ、或は峠を越えて、スキーを思ふさま走らせるのも、冬の山のみの持つ壯快さであらう。併し、彼等は雪の美しさに醉ひながらも、その反面にある恐しさから片時も目を離すことは出來ない。谷

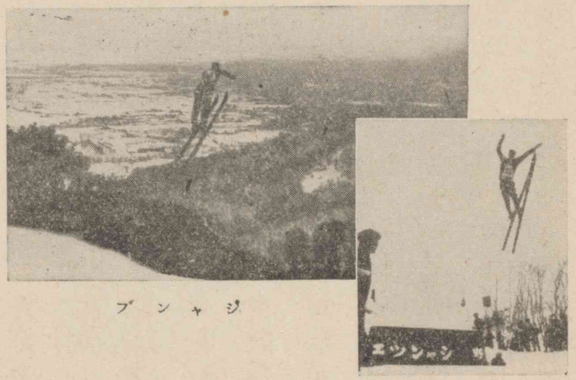
壯絶なる一瞬



に押し落して來る雪崩の暴虐さは、幾度か犧牲者を出して、多くの人に知られるやうになつて來た。雪の美しさを更に深く探り求めるために山に入つて行つた者は、やがて雪の持つ暴力に目を瞠らされたのだ。併し又、雪を知らうとする欲求は、この雪崩の暴虐さにより、更に一層強いものとされて來た。細かに雪の性質を分かち、その何れの一つをも見逃すまいとする彼等の努力は、驚歎する程である。

誰一人の踏み跡もない大雪原に、心ゆくまゝの一本の銀線を描かうとするためには、想像にも及ばない多くの努力が必要なのだ。それだけに又、粉雪を蹴立てて快心の一線を引き終つた時、遙かに斜面の上へと延び上つてゐるその銀線を顧みては、誰しも微笑(ほゝゑ)まずにはゐられまい。

スキーを著けて、愈山を下らうとするその刹那の緊張は、これから始らうとする最後の曲目に耳を澄ます心持だ。一日の登山の一切が、その最後の一走に依つて終るのだ。




ジャンプ

豪壯なスキーの味は、ジャンプに於て、始めてその頂點に達するのであらう。

山の斜面の兩側は、眞黑な見物人である。審判員の呼聲につれて、選手は順々に猛烈な勢で飛び下りて來る。そして彈丸のやうな勢で、踏切臺から飛び出してゆく。側に立つてゐれば、唸を立ててゆく風の音だけでも十分に興奮させられる。五十米・六十米、空中に見事な弧を描いて、遙か下の急斜面の上に落ちてゆく。スキーがその斜面に著く刹那、鋭く激しい音がする。併しもうこの瞬間には、スキーは素晴しい勢で滑り出してゐる。ずつと先の平地に下つて、鮮かな急角度で、雪煙を上げて止る迄、それは極く短い時の間の仕事である。併しその短い間にも、なほ幾つかの美しい運動の姿が展開されてゐる。

スタートから、猛然と滑りくだつて來る均齊の取れた姿。シャンツェを踏み切つてから下の斜面に落ちる迄、空中に弧を描いてゆく人とスキーとの美しい形。そして、再び斜面の上に立ち上つて、滑り去つてゆくなだらかな運動の連續。ど

シャンツェ、ジャンプ臺

スカンヂナヴィヤ　ヨーロッパ大陸の北西部に横たはる半島東部はスウエーデン、西部はノルウエー

の一つを取離しても美しい姿である。併し、その何れもが、僅か一瞬の間に過ぎ去つてゆく。それ程に、スキーのジャンプは、凄じい速度を必要としてゐる。スピードの與へる興奮と快感、それだけでも、スキージャンピングは優れたスポーツである。

遠い北の國、スカンヂナヴィヤで、必要に迫られて見出されたこのスキーは、最も華やかな冬のスポーツとなつてしまつた。そして冬の間死んだやうに眠つてゐた雪の國々に、朗かな光を齎して來た。今迄は家の内に閉ぢ籠つてゐた人達に祕められた雪の魅惑を知らせるために、戸外へと誘ひ出しにやつて來た。雪國の冬の生活が、どんなに生き〳〵と明るくなつたことか知れない。子供達は、夏の太陽の下にさへ雪を待ち焦れてゐる。

レオナルド・ダ・ヴィンチ　1452—1519　イタリヤの藝術家　科學者

アルプス　ヨーロッパの西南部に横たはる大山脈

レオナルド・ダ・ヴィンチは、こんな事を彼の手帳に書きつけてゐる「高い峯々の雪を持つて來て、夏の祭の日に降らせたい」と。北伊太利から望んだアルプスの雪は、この藝術家の心には、夏の祭の日にふさはしい華やかなものと映じたに違ひない。併し、私達には夏の祭の日は不必要だ。冬の雪の上に、もつと華やかな、もつと朗な樂しみが與へられてゐるのだ。

スキーを通じて與へられた雪の世界の喜は、冬への革命ではなかつたらうか。雪の魅惑は、人の心に力強く食ひこみつつある。冬といふ言葉の響さへ、聞く者に依つては、異なつた氣持を與へつゝあるではないか。

杉田玄白
名は翼
蘭學者　醫師
若狹國（福井縣）小濱藩士
文化十四年（一八一七）歿
年八十五
骨ケ原
小塚原
現東京市荒川區南千住町に在つた刑場
良澤
前野良澤
蘭學者　醫師
豐前國（大分縣）中津藩士
享和三年（一八〇三）歿
年八十一
タブレ・アナトミケ
解剖圖譜

# 一八　創始者の苦心

杉田玄白

骨ケ原に腑分を見たりし翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づ「タブレ・アナトミケ」の書にうち向かひしに、誠に鱇舵なき船の大海に乘り出せしが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれて居たるまでなり。されども、良澤は豫てより此の事を心に掛け、長崎迄も行き、蘭語竝びに章句・語脈の間の事も少しは聞き覺え、聞き習ひし人といひ、齡も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁はいまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、漸くに文字を覺え、彼の諸言をも習ひしことなり。



解體新書
タブレ・アナトミケの譯書
西洋解剖學書
譯の嚆矢
安永三年（一七七四）刊

偖、此の書を讀み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひしに、「とても初より內象の事は知れがたかるべし。此の書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。其の名處は皆知れたることなれば、其の圖と說の符號を合はせ考ふることは、取りつきやすかるべし。圖の初とはいひ、かたく〳〵先づこれより筆を取り始むべし」と定めたり。即ち解體新書形體名目篇これなり。其の頃は、助語の類も何れが何やら心に落ちつきて辨へぬことゆゑ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬

タブレ・アナトミケの扉

へば、「眉といふものは目の上に生じたる毛なり」といふやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らめられず。日暮るゝ迄考へ詰め、互ににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ざる程にてありしなり。

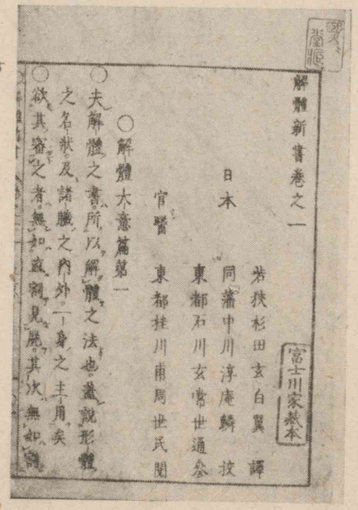
又或日、鼻の所にて、「フルヘッヘンドせしものなり」とあるに至りしに、此の語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。其の頃、辭書といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに、「フルヘッヘンド」の譯註に、「木の枝を斷ちたる跡、其の跡フルヘッヘンドをなし、又庭を掃除すれば、其の塵土聚りフルヘッヘンドす」といふやうに讀み出せり。これは如何なる意味なるべきかと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼ねたり。時に翁、「思ふに、木の枝を斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土集ればこれも堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、『フルヘッヘンド』は『堆し』といふことなるべし。然れば此の語は『堆し』と譯しては如何」といひければ、各〻これを聞きて、「甚だ尤もなり、『堆し』と譯さば適當すべし」と決定せり。其の時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の璧をも得し心地せり。

此の如き事にて、推して譯語を定めたり。其の數も次第次第に增しゆくこととなり、良澤のすでに覺え居し譯語書留をも增補しけるなり。其の中にも「シンネン」などいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたきことも多かりし。これらは亦ゆく〳〵は解く可き時も出で來ぬべし。先づ符號

連城の璧　惠王之珠、光能昭レ乘、和氏之璧、價重レ連城。（成語考）

シンネン　精神

を附け置くべしとて、丸の中に十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることをば「轡十文字」と名づけたり。毎會いろいろに申し合はせ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、其の苦しさの餘り、それも又「轡十文字」「轡十文字」と申したりき。然れども、「爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり」の喩の如くなるべしと、此の如く思を勞し、精を研り、辛苦せしこと一箇月に六七回なり。其の定日は怠りなく、わけもなくして各相集り、會議して讀み合ひしに、實に「不昧者は心」とやらにて、凡そ一年餘も


解體新書卷之一
日本
官醫
東都桂川甫周世民閲
○解體大意篇第一
○夫解體之書所以解體之法也蓋就形體之名狀及諸臓之內外「一身之主用矣
○欲其密之者無如或觀見焉其次無如

解體新書



過しぬれば、譯語も漸く增し、讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解するやうにて、後々は其の章句の疎き所は、一日に十行も、其の餘も、格別の勞苦なく解し得るやうになりたり。尤も、毎春參向の通詞どもへも聞き糺せし事もあり。又其の間には、解屍の事もあり、獸畜を解きて見合はせし事も度々なりき。

此の會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加り寄りつどふことなりしが、各志す所ありて一樣ならず。翁は一たび彼の國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差あることを知り明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日もはやく此の一部を用立つやうになし見たしと志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する所は其の夜飜譯して草稿を立て、それに就き

ては、其の譯述の仕方を種々樣々に考へ直せし事、四年の間に草稿は十一度認めかへて板下に渡す迄に至り、遂に解體新書飜譯の業成就したり。

抑江戸にて此の學を創業して、腑分といひ古りしことを新に解體と譯名し、且社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、日本國中の通稱ともなるに至れり。是、今時の隆盛を致せし嚆矢なり。今を以て考ふれば、是迄二百年來、彼の外科法は傳はりしなれども、直ちに彼の醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、此の時の創業、不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體內景の書にて、これが醫書新譯の起始となりしは、不用意を以て得し所にて、實に天意とやいふべき。

（蘭學事始）

蘭學事始
二卷
解體新書飜譯の苦心を中心とした回想錄
文化十二年（一七一五）成



## 一九　二宮尊德の幼時

富田高慶

先生、姓は平、名は尊德、通稱金次郎、其の先、曾我氏に出づ。二宮は其の氏なり。同じく二宮と稱する者、相模國栢山村に總べて八戸あり。皆其の氏族なりと云ふ。父は二宮利右衞門、母は曾我別所村、川窪某の女なり。祖父銀右衞門、常に節儉を守り、家業に力を盡くし、頗る富裕を致せり。父利右衞門の世に至り、邑人皆之を善人と稱す。民の求に應じ、或は施し、或は賑貸し、數年にして家產を減じ、積財悉く散じ、衰貧既に極まる。然りと雖も、貧苦に安んじ、敢へて昔日施貸の報を思はず。此の時に當つて先生生まる。實に天明七年七月二十三日なり。次子を三郎左衞門、末を富次郎と云ふ。父母貧困の中に三男

富田高慶
尊德の高弟
陸奥國（福島縣）の人
明治二十三年歿　年七十七
二宮尊德
農政家
相模國（神奈川縣）の人
安政三年（一五一六）歿
年七十
相模國栢山村
現神奈川縣足柄上郡櫻井村
栢山
曾我別所村
現同縣足柄下郡下曾我村曾我別所
天明七年
二四七年
光格天皇の御代

寛政三年　二四五一年　光格天皇の御代
酒匂川　富士山の東麓に發源し現神奈川縣の西部を流れて相模灣に注ぐ
大口の堤　文命堤　現足柄上郡福澤村斑目に在る

子を養育し、其の艱苦、言語の盡くすべきにあらず。

寛政三年、先生五歳、酒匂川洪水し、大口の堤を破り、數箇村流亡す。此の時、利右衛門の田圃、一畝も殘らず悉く石河原となる。素より赤貧、加ふるに此の水害に罹り、艱難彌〻迫り、三子を養ふに心力を勞すること幾千萬、先生終身、言此の事に及べば、必ず涕泣して、父母の大恩無量なることを云ふ。聞く者皆之が爲に涕を流せり。

某年、父病に罹り、極貧にして藥餌の料に當つべき物無し。已むを得ず、田地を鬻ぎて金貳兩を得たり。利右衛門疾治して歎じて曰く「貧富は時にして免れ難しと雖も、田地は祖先の田地なり。我治病の爲に之を減ずること、豈不孝の罪を免れんや。然りと雖も、醫藥其の價を謝せずんばあるべからず」と、



大息して醫に往き、貳兩を出し其の勞を謝す。醫師某眉を顰めて曰く「子の家極めて貧なり、何を以てか此の價を得たる」と。利右衛門答へて曰く「誠に予が赤貧なる、子の言の如し。されど家貧なるが爲に治療の恩を謝せずんば、何を以て世に立たんや。子、之を問ふに、實を以て告げずんば子の意も亦安からざるか。貧困極まれりと雖も、未だ些少の田地あり、之を鬻ぎて以て謝せり。子、勞すること勿れ」と。醫師、愀然として涕を流して曰く「予、子の謝を得ずと雖も、飢渴に及ばず。子、家田を失ひて一旦の義を立て、後日何を以て妻子を養はん。予、子の病を治め、却つて其の艱苦を增すを見るに忍びんや。速に其の金を以て田地を償ひ、予に報ずるを以て勞することなかれ」と。利右衛門肯んぜず。醫曰く「子、辭すること勿れ。貧富は

車の如し。子、今貧なりと雖も、安んぞ富時なきを知らん。若し、家富むの時に至り此の謝を爲さば、予も快く之を受けん。何の子細あらんや」と。是に於て利右衞門大いに感じ、三拜して其の言に隨ひ、強ひて其の半金を以て謝とし、其の半金を持ちて歸る。先生、父病後の歩行を案じ、其の歸路の遲きを憂ひ、門に出でて之を待つ。利右衞門、醫の義言を悅び、兩手を舞して歩行す。先生迎へて曰く、「何の故に悅び給ふこと此の如くなるや」と。父の曰く、「醫の慈言此の如し。我、汝等を養育することを得たり。是を以て悅に堪へず」と。

寛政十二年、先生十四、父利右衞門大いに病みて、日々に衰弱す。母子之を歎き、晝夜看病怠らず。家產を盡くして其の治を求め、鬼神に祈りて誠精を盡くせり。然れども命なるかな、



終に同年九月二十六日歿す。母子の悲歎慟哭甚だしく、邑人皆之が爲に涕泣せり。母、三子を養育するに艱難彌〻極まれり。母、先生に言つて曰く、「汝と三郎左衞門とは、我、如何樣にも養ひ遂げん。末子までは力に及ばず。三子共に養はんとせば、皆共に飢ゑんのみ」と。是に於て、末子を携へ緣者某に往きて、慈愛を請ふ。某、其の託を受けて、之を養ふ。母、悅びて家に歸り、二子に告げて共に艱苦を凌がんとす。然るに、母寢ねて徹夜寐ぬることあたはず。毎夜、流涕枕を沾す。先生、怪しみて問うて曰く、「毎夜寐ねたまはず、何の故なるや」と。母曰く、「末子を緣家に託せしより、我が乳張り、痛苦の爲に寐ぬることあたはず。數日を經ば、此の憂なからん。汝、勞することなかれ」と。言終らざるに、涕濟々たり。先生、其の慈愛の深き事を察し、泣

いて曰く「前には母君の命に隨ひ、末子を他に託せり。案ずるに、赤子一人ありとも何程の艱苦を增さん。明日より、某山に往き薪を伐り、之を鬻ぎて末子の養育を爲さん。速に彼を戻したまへ」と。母、此の言を聞き、大いに悅び「汝、しかいふは誠に幸なり。今より直ちに彼の家に到り、戻し來らん」と、速に起ちて往かんとす。先生、之を止めて曰く「夜、今、子に及べり。夜明けなば、予往きて抱き來らん。夜半の往返は止りたまふ可し」と。母の曰く「汝、幼若、猶末弟を養はんと云ふ、夜半の往來、何を以て厭はんや」と、袖を拂つて隣村の緣家に到り、旨趣を告げて末子を抱き家に歸り、母子四人、共に悅ぶこと限りなし。是より雞鳴に起きて遠山に到り柴を刈り、薪を伐りて之を鬻ぎ、夜は繩をなひ草鞋を作り、寸陰を惜しみ、身を勞し心を盡くして



大學　一卷　經書　もと禮記中の一篇　四書の一

小田原　現神奈川縣小田原市

母の心を安んじ、二弟を養ふことに勞苦せり。而して、採薪の往返にも、大學の書を懷にし、途中、歩みながら之を誦して少しも怠らず。是、先生聖賢の學の初なり。追路、高音に之を誦讀するが故に、人々怪しみ、狂兒を以て之を目するものあり。

小田原酒匂川は富嶽の下より流出し、數十里を經、小田原に至りて海に達す。急流激波、洪水毎に砂石を流し、堤防を破り、動もすれば田面を推し流し、民家を毀つに至る。年々、川除け堤の土功息まず。故に、邑民毎戸一人づつを出して此の役に當らしむ。先生、年十二より此の役に出で以て勤む。然れども、年幼にして力足らず、一人の役に當るに足らず。天を仰ぎ歎じて曰く「我、力足らずして一家の勤に當るに足らず。願はくは速に成人ならしめ給へ」と。又家に歸りて思へらく、人我

が孤にして貧なるを憐恕し、一人の役に當つといへども、我が心に於て何ぞ安んずることを得んや。徒らに力の不足を憂ふるも詮なし。他の勞を以て之を補はずんばある可からずと。是に於て、夜半に至るまで草鞋を作り、翌未明、人に先だちて其の場に到り、人々に言つて曰く「予、若年にして一人の役に足らず、他の力を借りて之を勤む。其の恩を報ずるの道を求むれども得ず。寸志なりといへども、草鞋を作りて持ち來れり。日々我が力の不足を補ふ人に答へん」と云ふ。衆人、其の志の常ならざるを賞し、之を愛し、其の草鞋を受けて其の力を助く。役夫休すれども休まず、終日孳々として勤む。此の故に、幼年なりと雖も、土石を運ぶこと却つて衆人の右に出づ。人皆之を感ず。

飯泉村觀世音　現足柄下郡豐川村飯泉に在る

觀音經　妙法蓮華經觀世音菩薩普門品　法華經二十八品の一　觀世音菩薩の慈悲を說いた經

善榮寺　現櫻井村栢山に在る曹洞宗の寺

先生十四歳の時、隣村飯泉村觀世音に參拜し、堂下に坐して念ずることあり。忽然として行脚の僧來り、堂前に坐して讀經す。其の聲微妙、其の經深理廣大、一聞了然として意中歡喜に堪へず。誦經既に畢る。謹みて僧に問うて曰く「今誦する所は何の經ぞ」と。僧應へて曰く「觀音經なり」と。曰く「予嘗て屢〻之を聞けり。而して今聞く所に異なり。何ぞ予が心に徹することの明らかなるや」と。應へて曰く「世の誦する所は吳音なり。今國音を以て轉讀せり。是子の解する所以か」と。先生、懷中を探り、錢二百を奉じて曰く「願はくは寸志を呈せん。今一たび誦讀し給へ」と。僧、其の志を感じ、轉讀、以前の如し。讀み畢つて去る。先生、胸中豁然として大いに喜び、栢山村善榮寺に到り、和尚に謁して曰く「大なる哉、觀音經の功德。其の

理廣大無量、其の意云々」と、說解流水の如し。和尙大いに驚きて、「予、旣に耳順を超えたり。此の經を誦すること幾百千遍、未だ其の深理を解すること能はず。然るに、子、若年、一たび讀誦を聽いて無量の深理を明解す。嗚呼、是、所謂菩薩の再來か。今、野僧此の寺を退くべし。子、願はくは僧となり、衆生の爲に此の寺に住し、大いに濟度の道を行ひ給へ」と云ふ。先生固辭して「是、予の望む所にあらず。予は祖先の家を起し、其の靈を安んぜんとす。志す所出家にあらず」と云ひて去る。是より後、彌〻佛意も諸人を濟ひ安んずるより大なるものなきことを了知せりと云ふ。

（報德記）

報德記
八卷
二宮尊德の傳記
安政三年（一五一六）成

西郷
西郷隆盛
舊鹿兒島藩士
陸軍大將參議
明治十年歿
年五十一
品川
現東京市品川區の內
おれ
勝安芳
樞密顧問官
伯爵
舊幕臣
明治三十二年歿
年七十七
薩摩屋敷
現東京市芝區本芝に在つた
板橋
現同市板橋區の內
伊地知
伊地知正治
宮中顧問官
伯爵
明治十九年歿

## 二〇　西郷の一言

官軍が品川まで押寄せて來て、今にも江戸城へ攻め入らうといふ際に西郷はおれが出した、わづか一本の手紙によつて、芝田町の薩摩屋敷まで、のそ〳〵談判にやつて來た。

あの時の談判は、實に骨だつた。官軍に西郷がゐなかつたら、話はとても纏らなかつたらう。その時分の形勢はといへば、品川からは西郷などが來る。板橋からは伊地知などが來る。又江戸の市中では、今にも官軍が乘りこむといつて、大騷ぎをしてゐる。しかし、おれは外の人々には頓著せず、たゞ西郷一人に眼をつけた。

そこで、ごく短い手紙を一通やつて、雙方何處かで出會つた

上、談判致したいといふ旨を申し送り、また、その場所は田町の薩摩の別邸がよからうと、こちらから選定してやつた。すると、向ふからも早速承知したと返事をよこして、いよいよ何日の何時と時をきめて、薩摩屋敷で談判を開くこととなつた。

勝海舟

當日おれは羽織袴で馬に乘り、從者を一人連れたばかりで、薩摩屋敷へ出かけた。まづ一室へ案内されて暫く待つてゐると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引切下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を從へ、平氣な顔で出て來て、

熊次郎　永田熊吉を、す　西郷家の從僕





「これは、實に遲刻しまして失禮」と挨拶しながら、座敷に通つた。その樣子は一大事を前に控へた人のやうには見えなかつた。

西郷隆盛

さて、いよ〳〵談判になると、西郷はおれのいふ事を一々信用してくれて、その間に一點の疑念も挾まなかつた。「色々むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受けします。」西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つことが出來、又德川氏も滅亡を免れたのだ。若しこれが他人であつたら、「いや、貴樣のいふ事は、自家撞著だ」とか、

桐野
桐野利秋
陸軍少將
薩鹿兒島藩士
明治十年歿

「言行不一致だ」とか「澤山の兇徒があの通り處々に屯集してゐるのに、恭順の實は何處にあるか」とか、色々喧しく責めたてたに違ひない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。しかし、西郷はそんな野暮はいはない。その大局を達觀して、しかも果斷に富んでゐたには、實に感心した。

この時の談判がまだ始らない前から、桐野などといふ豪傑連中が大勢で次の間へ來て、ひそかに樣子をうかゞつてゐる。薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひし〳〵とつめかけてゐる。その有樣は實に殺氣立つて物凄い程であつた。しかるに、西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないもののやうに、談判を仕終へてから、おれを門の外まで見送つた。おれが門を出ると、近傍の街々に屯集してゐた兵隊が、どつと一時に押寄せて來たが、おれが西郷に送られて立つてゐるのを見て一同恭しく捧げ銃の敬禮を行つた。おれは自分の胸を指して、兵隊に向かつて「いづれ今明日中には何とか決著致すであらう。決定次第にて、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬることもあらうから、よく〳〵この胸を見覺えておかれよ」と言ひ捨てて、西郷に暇乞をして歸つた。

この時、殊に感心したのは、西郷がおれに對して幕府の重臣たる禮を失はず、談判の時にも、始終座を正して手を膝の上に載せ、少しも戰勝の威光で敗軍の將を輕蔑するといふやうな風を見せなかつた事である。その膽量の大きいことは、所謂天空海闊で、見識ぶるなどといふことは、固より少しもなかつた。

（吉本襄編氷川清話）

## 二一 天

一、道は天地自然のものにして、人はこれを行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふ故、我を愛する心を以て人を愛すべきなり。

一、道は天地自然の道なる故、講學の道は、敬天・愛人を目的とし、身を修むるに克己を以て終始するにあり。總じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝものぞ。能く古今の人物を見よ。事業を創起する人、其の事大抵十に七八迄は能く成し得れども、殘り二つを終まで成し得る人の稀なるは、始は能く己を愼み、事をも敬する故、功も立ち、名も顯るゝなり。功立ち名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒愼の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其の成し得たる事業を負み、終に敗るゝものにて、皆自ら招くなり。故に、己に克ちて、睹ず聞かざる所に戒愼すべきものなり。

一、人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡くし、人を咎めずして我が誠の足らざるを尋ぬべし。

一、事大小となく、正道を蹈み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは、事の差支ふる時に臨み、作略を用ひて、

西郷南洲筆蹟

一旦其の差支を通せば、後は時宜次第工夫の出來るやうに思へども、作略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先に行けば成功は早きものなり。

一道を行ふ者は、天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの厚きが故なり。

一何程制度・方法を論ずるとも、其の人に非ざれば行はれ難し。人ありて後方法の行はるゝものなれば、人は第一の寶にして、己、其の人に成るの心懸け肝要なり。

一、命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。



一、己を愛するは、善からぬことの第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出來ぬも、功に矜り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するが爲なれば、決して己を愛せぬものなり。

一、過を改むるには、自ら過てりと思ひつかば、夫にてよし。其の事をば棄てて顧みず、直ちに一歩踏み出すべし。過を悔しく思ひ取繕はんとて心配するは、譬へば茶碗を割り、其の缺けを合はせ見るも同じにて、詮もなきことなり。

一、世人の唱ふる機會とは、多くは僥倖のみ。眞の機會は、理を盡くして行ひ、勢を審にして動くといふに在り。平日、國家天下を憂ふる誠心厚からずして、たゞ時のはずみに乘じて成し得たる事業は、決して永續せぬものぞ。（南洲翁遺訓）

# 三　廚子王

森鷗外

森鷗外
名は林太郎
小說家　劇作家
文學博士
醫學博士
陸軍軍醫總監
帝室博物館總長兼圖書頭
島根縣の人
大正十一年歿
年六十一

廚子王
陸奥掾平正氏の子

山椒大夫
丹後國由良（現京都府加佐郡由良村）の長者

姉
安壽

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ腰に鎌を插して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始である。

廚子王は姉の心を忖りかねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に胸が一ぱいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つたあとで、いろ〳〵に詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打明けずにしまつた。

山の麓に來た時、廚子王はこらへかねて云つた。「姉さん。わたしはかうして久しぶりで一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見ることが出來ません。姉さん。あなたはわたしに隱して、何か考へてゐますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を赫かしてゐる。併し弟の詞には答へない。唯引き合つてゐる手に力を入れただけである。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縱横に亂れてゐるが、道端の草には黃ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の涌く所がある。そこを通りすぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのである。

丁度岩の面に朝日が一面に差してゐる。安壽は疊(かさな)り合つた岩の風化した間に根を卸して、小さい菫の咲いてゐるのを見つけた。そしてそれを指さして廚子王に見せて云つた。

「御覽。もう春になるのね。」

廚子王は默つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので、とかく受け應へが出來ずに、話は水が砂に沁み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を刈つた木立の邊に來たので、廚子王は足を駐めた。

「姉さん、こゝらで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」安壽は先に立つてずん〳〵登つて行く。

廚子王は訝りながら附いて行く。暫くして雜木林よりは

石浦　現京都府加佐郡由良村石浦
由良の港　同郡由良川の河口に在る
大雲川　由良川　現京都府北桑田郡に發源し加佐郡舞鶴町の西で日本海に注ぐ
中山　現加佐郡八雲村中山　大雲川の東岸
都　京都
筑紫　九州
佐渡　日本海の島　今新潟縣佐渡郡を成す
岩代　岩代國　現福島縣の內

餘程高い、外山の頂ともいふべき所に來た。

安壽はそこに立つて、南の方をじつと見てゐる。目は、石浦を經て、由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔たつた川向かひに、こんもりと茂つた木立の中から塔の尖の見える中山に止つた。そして「廚子王や」と弟を呼び掛けた。

「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつものやうに話をしないのを變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし引返して佐渡へ渡るのもたやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。おかあ樣と御一しよに岩代を出てから、わたし共は恐しい人にばかり

出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて此の土地を逃げ延びて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導で、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたおとう樣のお身の上も知れよう。佐渡へおかあ樣のお迎へに往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、樏子だけ持つて往くのだよ。」

廚子王は默つて聞いてゐたが、涙が頰を傳つて流れて來た。

「そして、姉さん、あなたはどうしようといふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積りでしておくれ。おとう樣にもお目に掛り、おかあ樣をも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」



「でも、わたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」廚子王が心には、烙印をせられた、恐しい夢が浮かぶ。

「それはいぢめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢をあの人達は殺しはしません。多分、お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」かう云つて、安壽は先に立つて下りて行く。

廚子王はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いて下りる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、姉は早

くおとなびて、其の上物に憑かれたやうに聰く賢しくなつてゐるので、廚子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の所まで下りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。此の地藏樣をわたしだと思つて、守刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも姉さんにお守が無くては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと討手が掛ります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひつかれるに極つてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ所まで

和江　現八雲村和江中山の對岸



往つて、首尾好く人に見つけられずに向う河岸へ越してしまへば、中山まで、もう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、討手が歸つて來たあとで、寺を逃げてお出で。」

「でも、お寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら坊さんがお前を隱してくれませう。」

「さうですね。姉さんのけふ仰しやる事は、まるで神樣か佛樣が仰しやるやうです。わたしは考を決めました。なんでも姉さんの仰しやる通りにします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隱してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。おとう樣やおかあ樣にも逢はれます。姉さんのお迎へにも來られます。」廚子王の目が姉と同じやうに赫いて來た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出で。」

二人は急いで山を降りた。足の運びも前とはちがつて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の涌く所へ來た。姉は樏子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かう云つて、一口飲んで弟に差した。

弟は椀を飲み干した。「そんなら姉さん、御機嫌好う。きつと人に見つからずに中山まで參ります。」

廚子王は十步ばかり殘つてゐた坂道を、一走りに驅け下りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて、竝木の松に隱れては又現れる後影を、小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふは此の方角の山で木を樵る人が無いと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を搜しに出た山椒大夫一家の討手が、此の坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が込み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に言つた。「これへ參つたのは、石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が此の山に逃げこんだのを、慥に認めたものがある。隱れ場は寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。附いて來た大勢が、「さあ、出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其の石疊の上には、今、手に〳〵松明を持つた三郎が手のものが押し合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限りの僧俗が、殆ど一人も殘らず簇つてゐる。これは討手の群れが門外で騷いだ時、内陣からも庫裡からも、何事が起つたかと怪しんで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら亂暴をせられはすまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今三郎が大聲で、逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢたまま、暫くの間ひつそりとしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰返した。手のものの中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑ひ聲が交る。

やう〳〵の事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自

分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い岩疊な體と、眉のまだ黑い康張つた顏とが、搖らめく火に照らし出された。律師はまだ五十歲を越したばかりである。

律師は徐に口を開いた。騷がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで默つたので、聲は隅々まで聞えた。「逃げた下人を搜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて多人數押寄せて參られ三門を開けと云はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて、三門を開けさせた。それに

東大寺　現奈良市雜司町に在る華嚴宗の總本山　總國分寺　奈良七大寺の一

なんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを好う思うて見て、早う引取られたが好からう。惡い事は云はぬ。お身達のためぢや。」かう云つて、律師は徐に戶を締めた。

三郎は本堂の戶を睨んで齒咬みをした。併し戶を打破つて踏みこむだけの勇氣もなかつた。手のものどもは唯風に木の葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此の時大聲で叫ぶものがあつた。「其の逃げたと云ふのは、十二三の小わつぱぢやらう。それならわしが知つてをる。」

三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此の寺の鐘樓守である。親爺は詞をついで云つた。「其のわつぱはな。わしが午頃鐘樓から見てをると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわい代りには身が輕い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け」といつて三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やう〳〵落著いて寢ようとした鴉が二三羽、また驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引返した事を聞いて來た。

田邊　田邊郷　現舞鶴町附近一帶の地

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。あとからは頭を剃りこくつて三衣を著た廚子王が附いて行く。

（山椒大夫）

安壽こひしや、ほうやれほ。
廚子王こひしや、ほうやれほ。
鳥も生あるものなれば、
疾う疾う逃げよ、逐はずとも。

（山椒大夫）

# 二三 潮の音

島崎藤村

わきてながるる
やほじほの
そこにいさよふ
うみの琴
しらべもふかし
ももかはの



よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うららかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

〔出所〕
詩集「若菜集」

小泉八雲
ラフカヂオ・ハーン
文學者
東京帝國大學講師
イギリス人
後日本に歸化
明治三十七年歿　年五十五
松江市

# 二四　神國の首都

小泉八雲

松江の一日に於ける最初の物音は、寢てゐる耳の眞下で、ゆつくりと大きく搏つてゐる脈のやうに響いてくる、太い、柔らかい、鈍い打擊の音だ。その規則正しさと、そのこもつたやうな深さと、その聞えるといふよりは寧ろ感じられるやうに枕を通して搖れ上つてくる趣とは、心臟の鼓動に似てゐる。それは米搗きの音なのだ。杵は一種の巨大な木槌で、その一丈五尺程ある柄は、支軸の上に水平に取りつけてある。米搗き男は、まづ柄の端を全身の力で踏んで杵を擧げる。それから、杵をそれ自身の重みで臼の中に落下させる。一定の拍子で、こもつたやうに響いて來る杵の音は、日本人の生活に伴なふ



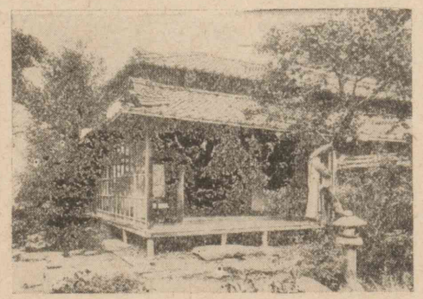


洞光寺
松江市雜賀町に在る曹洞宗の寺

あらゆる音響の中で、最も感じの深いものに思はれる。實際、それは日本といふ國土の脈搏なのだ。

それから、禪刹洞光寺の梵鐘のとゞろきが街の上空に震へる。續いて、近所の材木町の地藏堂から、太鼓の憂鬱な反響が晨の勤行の時を告げる。そのあとから、一番早い物賣の聲が聞え出す。「大根やい、蕪菁や、蕪菁。」「焚附や、焚附。」

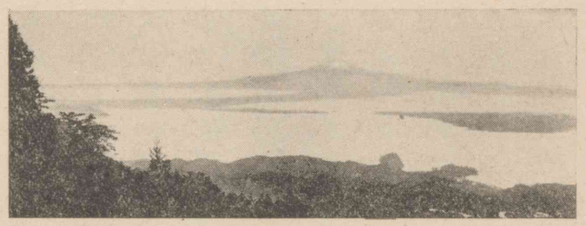
目覺めてゆく町の生活をさきがけるかういふ物音に呼び起されて、私は小さな二階の障子を開け、川に添うた下の庭から伸びてゐる、春の若葉の軟らかな綠の雲越しに、朝景色を眺めやる。眼の



（舊松江　小泉八雲邸）

宍道湖 松江市の西に在る鹹湖
大橋川 宍道湖の東部に發源し中海に注ぐ

前には、宍道湖の水を受ける大橋川の、廣い鏡のやうな流れ口が、わなゝくやうに對岸の萬象を寫して仄かに光つてゐる。湖は廣々と右手に廣がり、淡黑い連丘を額縁にしてゐる。川を距てた眞向かひの家々は、まだ戸を締め切つてある。夜は明けたが日はまだ出ないので、箱を閉ぢたやうに締めてある。



宍道湖

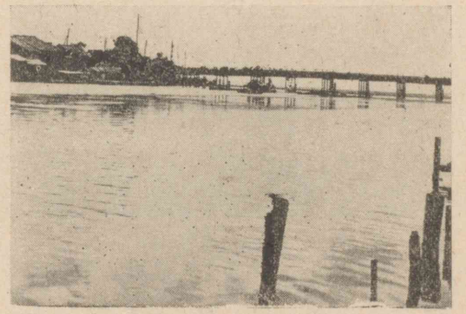
幾條かの薄色の霞が湖水の向う岸に長くかゝつてゐる。日本の昔の繪本で見るやうな星雲狀の長帶だ。しかし、あゝいふ繪も、實際の現象を見ない人には、畫家が氣まぐれに畫がいたものとしか思はれないであらう。それが



山といふ山の裾を蔽ひ、又峯から峯へ亙つて、或は高く或は低く、涯知れぬ長さの紗のやうに延びてゐる。そのために、湖水は實際よりも遙かに大きく見え、味爽の空と一つ色に融け合つた美しい幻の海となつてゐる。山々の嶺はさながら霞に浮かんだ島嶼で、幻のやうな一帶の丘陵は、長い〳〵土手道のやうに眼界の外に消えてゐる。美はしい混沌だ。しかも、その趣は、霧が徐々に徐々に昇るにつれて、絶え間なく變つて行く。旭日の黃色な緣が見えてくると、今までよりは溫かい調子の纖い纖い光線—分光色の紫と乳白色—が水の上を越えて來、梢の頂は弱い光をうけ、對岸の高い建物の木地の色は、美しい靄のために、濛々たる黃金色に變る。

朝日の方へ向くと、大橋川の下手、橋杙の數多立並んだ木造

の橋の彼方に、船尾の上つた一艘の和船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。私はまだ、こんなに異樣に美しい船を見たことがない。正にこれ蓬萊の夢だ。それほど霞のために理想化されてゐる。船の精だ。——だが、この精は雲と同樣に光を受ける。金色の霞で出來た船の像(かたち)だ。——そして一見半透明に、薄青い光の中に浮かんでゐる。



大橋川

庭先の川端から手を打つ音が起つてくる。一回、二回、三回、四回。けれどもその主は植込に遮られて見えない。とはいへ、同時に、對岸の船著き場の石段を、腰



杵築の大社
出雲大社
島根縣簸川郡
大社町に在る
官幣大社
祭神大國主命

に藍染の手拭をつけた男や女の下りて來るのが見える。彼等は顏と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈の前にきまつて行ふ潔齋である。それから顏を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い高い橋の上からも、別な拍手の音が反響の如くに聞えてくる。遠くにある、輕い優美な、新月のやうに彎曲した小舟からも聞えてくる。このすばらしい舟の上に立つて、手も足も裸の漁師が金色の東天を拜んでゐるのである。今や拍手は繁くなつて、遂に殆ど鋭い音の連發となつた。それは總べての人々が、今や、朝日—火の女王お日樣—偉大なる光の女王天照大神を拜んでゐるからである。朝日に向かつてだけ手を拍つ者もあるが、大抵の者は又、西の方杵築の大社へ向かつてもさうするのである。顏を天のあらゆる方向へ

一畑山　簸川郡東村に在る藥師如來の大伽藍
一畑山に在る臨濟宗の名刹一畑寺の藥師堂

つぎ〳〵に向けて、百神の名を低聲で唱へる者さへある。日の女王を拜んだ後、一畑山を仰いで、盲人の眼を開き給ふといふ藥師如來の大伽藍の方に向かひ、今度は佛教風に掌を合はせ、輕く擦つて拜む者もある。しかし、日本で最も古風なこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰もみな古めかしい神道の禮拜の文句を唱へる。「拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゐみため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始る。下駄のからころといふ音が、だん〳〵高くなつてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れることの出來ない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で動いて行く。朝日の差した橋上に無數の足がちら〳〵するのは、驚くべき光景である。その足は、皆小さくて、均齊を得てゐて、ギリシヤの古甕に描いた人物の足のやうに輕やかである。

今度は、學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駈ける時、綺麗な飛白の著物の闊い袖がひら〳〵するのは、全く大きい蝶が羽搏きをするやうである。和船は白や黄の大きい翼を廣げ、船著き場の側で夜中睡つてゐた小蒸氣船は、煙筒から煙を吐き始める。

（未だ知られざる日本の面影）

# 國語 卷四 終



昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年七月四日發行
昭和十二年十二月十八日訂正再版發行
昭和十六年十月十五日新訂第一刷印刷
昭和十六年十月十九日新訂第一刷發行

國語 全十卷
定價 各册 金五十五錢㊞

編輯者 岩波編輯部
代表者 岩波茂雄

發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社印刷所
代表者 白井赫太郎
(東東四一)

(略名) 岩波編國語

版權所有

發行所 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

日本出版文化協會 元給配
東京市神田區淡路町二ノ九

廣陵中學校第二學年四組(19)

遠藤茂

広島大学図書
2000302250